
論 説

サヴィニー (1779–1861) と 重利についての覚書

田 中 実

はじめに

- 1 現行法学者として
 - 2 文献学者として
 - 3 サヴィニー以後の書簡研究
- おわりに

は じ め に

法解釈の方法の中に、歴史的方法と体系的方法がある。6 世紀の編纂法典であるローマ法大全を裁判規範とする法域では、註釈学派が認識し、註釈を付していた法文に裁判規範を限定した上で (*quicquid non agnoscit glossa, nec agnoscit curia*), 法文そのものに対する批判的検討を抑制的に行いつつ、大全をいわば共時的に捉え、一見矛盾するような収録法文間における事実関係や要件効果を区別することで矛盾を調和し、実務に耐えうる法規範を抽出するのが体系的方法であり、大全を通時的に捉え、立法や学説につき前法と後法がともに収録されていると想定し、法文間の矛盾を解消するのが歴史的方法である。ユスティニアヌス帝は自己の編纂法典について整合的な規範体系であると自任していたが (*Constitutio Tanta*, 15), サヴィニーが、裁判規範としての現代ローマ法を抽出するにあたり、前者の方法を原則とし、後者を例外的に用いたことはつとに知られている¹⁾。

これとは別に、ローマ法の歴史的展開そのものを研究対象とすることも行われる。その際に、非法律文献を含め、ローマ法大全以前の史料はもちろんのこと、大全の収録法文も——批判的手法が全面的に駆使された上で——重要な史料となる。法文には、6世紀の編纂法典の中での意味と、本来の成立期における意味の二様の解釈 (interpretatio duplex) が行われ²⁾、さらに Textstufen も探求される³⁾。人文主義法学者あるいは復古学派ひいては古事学者や文献学者そして歴史家は、共時的な把握のみならず、歴史的な叙述を試みる。なるほど、彼らの研究成果が、編纂法典の体系的解釈に、あるいはいずれの解釈を採用すべきかの線引きに影響を与えることも十分に考えられる。しかし、収録法文成立時代の、ひいてはそれ以前のローマの法状態そのものの研究が体系的解釈論に対して影響を与えるのはより間接的になる。

言うまでもなく、サヴィニーは、法解釈学者として、先に述べたローマ法大全の解釈準則を用いて、裁判規範としての現代ローマ法を確定する作業を精力的に行ったのみならず、今日でもなお研究の基準となっている『中世ローマ法史』を著し⁴⁾、その他の文献学的研究も公にしてきた。彼が世に問うたすべての業績につき、素材や方法、目的が異なるとして統一的な像を描く必要はないのか。例えば法学方法論について、よく知られたマルブルクの法学方法論と歴史法学の綱要との齟齬、綱要論文と『現代ローマ法体系』とのズレに対し、時の経過による考え方の変化に注目する歴史的解釈も、あるいは彼の用いた概念を精査し、関心や問題設定の違いを鮮明にしつつ、首尾一貫したものを求めるアプローチも考えられる。サヴィニーのように同時代に中心的役割を果たしリアルタイムに影響を与える人物は、法学全体のトレンドへの危惧からくる配慮を怠らなかつたと想定することも理に適っている。彼の場合、ベルリンの大学に移り、同地のアカデミーの会員になったばかりの新人文主義を強調する時期と、有能な人士として実務に関与する中で培われる新たな意識が確立する時期を想定することも不当ではない⁵⁾。いずれせよ、ある学者が、古事学や文献学はそれとして、現行法の解釈はそれとして、それぞれ自己の力量を披露することは、普通法法学者としては異例

のことではない。本稿は、こうした一連の問題から問いを立て解答を試みるものではなく、重利 (usurae usurarum, anatocismus, ἀνατοκισμός) をめぐる彼の現行法解釈と文献学的研究を紹介する覚書にすぎない⁶⁾。サヴィニーを評価するにあたっての参照資料の一つを提供すると同時に、彼がそれぞれの研究で取り組んだ事件や事項が、我々が利息や重利の歴史について論じる際に思い浮かべるイメージをより豊かにすることが主な目的である。

1 現行法学者として

重利に関して、ユスティニアヌス帝による 531 年の宣示 (C.7.54.3pr.) はその徹底した撲滅に言及している。同帝は、529 年の宣示 (C.4.32.28pr.) が、未払利息の元本への組入れも含め重利を禁じ、時期を特定することはできないにせよ、重利禁止が古法でも定められていたことにも触れている。実際、ディオクレティアヌス帝・マクシミアヌス帝による 290 年の宣示 (C.2.11.20) は、重利の請求に対し破廉恥の制裁を課し、それ以前に、例えば、3 世紀初頭の、ウルピアヌス『告示註解』26 卷 (D.12.6.26.1)⁷⁾、彼の弟子モデスティヌス『解答録』1 卷 (D.42.1.27)⁸⁾、そして、おそらく同じく弟子であった⁹⁾マルキアヌス『法学提要』14 卷 (D.22.1.29)¹⁰⁾ は重利の違法性を述べている¹¹⁾。これらの法文はいずれも註釈付であり、カノン法の利息徴収そのものの禁止が適用されなくなった後にも、継受ローマ法として現行法の法源とされる¹²⁾。

サヴィニーは、1840 年出版の『現代ローマ法体系』1 卷 29 節において、現行法学者として、裁判規範たる慣習法の要件に関してこの重利禁止の法規範に言及している¹³⁾。彼は、慣習法を認める要件として、錯誤や合理性については慣習法の徴表たる反復行為の性質であると捉え、この二つは慣習法の独立した要件ではなく、その行為が適法あるいは法的義務であるとの確信いわゆる *opinio necessitatis* の要件に解消されるとしている。そして、この関連で、重利が禁止されている場合に、その技巧的な隠蔽、脱法行為が継続的

に行われてきたとしても、この *opinio necessitatis* の要件が満たされず慣習法を証明するものではない、と分かりやすい例を挙げている¹⁴⁾。これとの対比で、年末あるいはより短期に未払利息を元本に組み入れるという商人階級 (*Handelsstand*) における商慣行は、公然と一般的に (*offen und allgemein*) 行われ、誰しも義務であり適法であるとの感覚をもって (*im Gefühl der Notwendigkeit und Rechtmässigkeit*) 従っているものであり、この慣習法によってローマ法の重利禁止が改廃されていることを主張する。ちなみに、慣習法による重利禁止の改廃は、そもそも利息徴収が禁じられていた普通法時代にあっても、ユダヤ人債権者による金銭消費貸借契約に基づく重利の請求さえも、助言文献を通じて認められることがあったように、利息規制と慣習法の問題は常に密接に結びついていたのである¹⁵⁾。

さて、19 世紀ドイツ語圏における実務家用手引書『普通法適用法域の実務法費用市民法論争事典』(*C. Matthiae, Controversen-Lexikon des Römischen Civilrechts: Ein Hilfsbuch für praktische Juristen derjenigen Länder, in welchen Römisches Recht gilt*, Leipzig Bd. 1, 1856) の「利息」の項目における、未払利息の組入れや重利の問題を扱う箇所では、先例 (*Praejudiz*) I として、『ゾイフェルト判例集』¹⁶⁾からの判決文がそのまま転載されている。その冒頭は、若干齟齬があるものの、サヴィニー『体系』の文言の引用から始まる¹⁷⁾。ゾイフェルトによれば、判例や実務の立場は、重利を適法としたものと、そうではないものとに分かれている。1843 年 5 月 12 日のミュンヘン上級裁判所 (*Oberappellationsgericht in München*)¹⁸⁾ は、「重利に関するローマ法の規定 (C. 4.32.8) は、なるほど今日でもなおドイツにおいて法的効力があるが、——ほぼ一般的に有効な商慣習によれば——互いに当座勘定を行う商人の取引関係には適用されない」として、Johann H. Bender (1797–1859), Carl. J. A. Mittermaier (1787–1867) などと並んでサヴィニー『体系』の当該箇所を援用し、その商慣行 (*Handelsgebrauch*) の証明が許されると判示している。Eduard F. Souchay (1800–1872) は、フランクフルト改革都市法典に関する 1848 年出版の解説書で¹⁹⁾、重利の問題につきサヴィニーを援用することなく、利息も含まれる商人の当座勘

定の負債残高について重利計算がなされるとの明白な実務はローマ法とは調和困難である (*nullum casum relinquimus ex quo huiusmodi machinatio possit induci*) としながら、この実務とは異なる規定を維持することはあらゆる取引を困難にすると断言し、未払利息の元本への組入実務を認めた。これに対して、1840 年のドレスデン上級裁判所 (*Oberappellationsgericht zu Dresden*) の判決は、「利息の利息に関して、主張された商慣習 (*Handels=usage*) (つまり利息が各年末に元本に組み入れられること) および債務者側からのそうした利息に関する契約による確約は法的に有効である (*rechtsbeständig*) と認めなければならない……とする法律がない」²⁰⁾とし、慣習を承認するのに実定法規の存在が必要であることを強調していた。このように、掲載判例の立場は区々であるものの、サヴィニー『体系』1 巻の出版年に、まだ民法典を有さず、普通法の有力な法域であったザクセンでは、重利の商慣習の法規範力は認められなかったのに対し、その後、バイエルンやフランクフルトでは認められたことが確認できる。

『ゾイフェルト判例集』では言及されておらず、しかも商事債務でもない重利をめぐる判例が、サヴィニーの『体系』1 巻出版以前にあった。原告は市町村小連合 (*Amtskorporation, Amtsverband*) であり、被告は行政区画の改変に伴いそこから脱退した小規模な地方自治体 (*Gemeinde*) で、その精算について 1819 年に行われた合意をめぐる争いである。事案は複合的な法律問題を含んでいるが、重利に関しては、原告は、精算による合意は更改であり、更改にあたり新たな元本債務に含まれているそれまでの未払利息債務についても重利にあたらないと主張した。第二審は原告の主張を認めたのに対して、第一審と第三審が重利の禁止に違反すると判示して請求を棄却していた²¹⁾。

サヴィニーについて、商慣習法による改廃が認められない事件について重利禁止を堅持する立場であったと思われる傍証を加えることができる。先の Souchay が、ローマ法の利息制限に対する例外を解説するにあたり指摘していたことであるが、サヴィニーは、1847 年出版の『体系』6 巻において、ティボーとは異なり、既判力を有する判決債務につき、利息債務の部分につ

いて判決確定4か月後からの利息進行を否認していたのであり²²⁾、重利禁止に対し元本債務と利息債務を判決確定後に区別して、その禁止を厳格に適用していたと思われる²³⁾。このように、重利禁止の厳格な適用例として確認されたのは、地方自治体の融通の問題や、判決債務に関するものであり、事業展開のための商人間の資金調達といった純粋に私的な領域で生じたものではなかった。

2 文献学者として

さて、こうした現代ローマ法体系で重利に対する立場を明確に提示する20年以上前に、サヴィニーは、1819年3月25日ベルリン科学アカデミーにおいて、「マルクス・ブルトゥスの暴利について」(Ueber den Zinswucher des M. Brutus)と題して、重利そして未払利息の元本への組入れ自体が許されていた時代の、キケロによる『アッティクス宛書簡集』(以下、単に『書簡集』と表記)の著名な書簡につき文献学的研究を披露し、その原稿は『ベルリン王立科学アカデミー論集 歴史・文献学部門』(*Abhandlungen der Königl. Akademie der Wissenschaften in Berlin, 1818/1819, Historische Philologische Klasse*, Berlin 1820, S. 179–188)に掲載され、翌1820年には単著としても出版され、補遺を加えて1849年の『論集』1巻に収録された²⁴⁾。彼が取り上げるこの書簡については、古典作品の印刷・出版業者として名高いヴェネツィアの人文主義者アルド・ピオ・マヌーツィオ(Aldo Pio Manuzio, Aldus Pius Mautinus (ca. 1450–1515))の²⁵⁾末息子パオロ・マヌーツィオ(Paolo Manuzio, Paulus Martinus (1512–1574)) (以下、この息子を単にマヌーツィオと表記)が16世紀前半に註記を施し出版して以来、批判的に読み継がれてきた²⁶⁾。今日でも、共和政末期には重利が認められていたことの証左として必ず挙げられる書簡であるが²⁷⁾、サヴィニーは、講演で、この書簡の彼以前の理解と取り組みつつ、キケロが言及する消費貸借契約をめぐる事件の正確な把握に努めた。そして、彼が取り上げたこの書簡

は、同じ 19 世紀の世紀末に、主としてドイツ語圏で、あらためて詳細な議論を引き起こすことになる。なるほどローマ法とローマ史の碩学 Mommsen もこの議論に参画するが²⁸⁾、彼の作品は賛同を得ることなく、むしろ議論を牽引したのは、Carl Bardt (1843–1915)²⁹⁾や Wilhelm Sternkopf (1859–?)³⁰⁾といった、19 世紀末のギムナジウムの教員たちで、中には、古典的・保守的なギムナジウム教育の批判者として有名な Ludwig Gurlitt (1855–1931)³¹⁾も含まれており、当時のドイツの文献学の層の厚さを示す好例となっている³²⁾。このため今日では、サヴィニーが書簡をめぐる議論を再燃させたという事実のみが言及され、専らサヴィニー以後の議論が紹介されるのが通例であるが、ここではサヴィニー以前そして以後の議論も念頭に置きつつ、彼の立論を今一度振り返ろう³³⁾。

ちなみに、1810 年代のサヴィニーは³⁴⁾、1810 年にベルリン大学に移り、同年アカデミーの会員 (Mitglied der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften) に、11 年から (26 年まで) 法学部の判決団メンバー (Mitglied des Spruchkollegiums der Fakultät) に³⁵⁾、早くも 12 年から 13 年にかけて総長になり、さらに 17 年からはプロイセン枢密顧問 (48 年まで) に³⁶⁾、19 年には (41 年まで)、直接にフランス民法典を法源とする法域であるラインラントの破棄裁判所判事 (Mitglied des Preußischen des Revisions- und Kassationshofs für die Rheinlande)³⁷⁾となる。この間、学者としては、1814 年綱要論文『立法と法学に対する我々の時代の使命について』(Vom Beruf unserer Zeit für Gesetzgebung und Rechtswissenschaft)のほか、15 年『歴史法学雑誌』初巻発刊、17 年『中世ローマ法史』1 巻刊行といったように、法制史学者としても活発な研究執筆活動を行っていた。つまり、立法司法を担う実務法曹や大学教授として活躍する中であって、1819 年にアカデミー会員に相応しい研究を披露したのである。もっとも、あまりに intensiv な活動から、1822 年には、ひどい神経衰弱症に陥り、旅行など療養を余儀なくされ、しだいに復習講義や判決団のみならず、アカデミーからも距離を置かざるをえなくなり³⁸⁾、『中世ローマ法史』の漸次刊行 (15–31 年) も³⁹⁾、決して順風満帆ではなかった⁴⁰⁾。

講演の冒頭で、サヴィニーは、キケロによるアッティクス宛の四つの書簡が、当時の属州の利息と当事者の性格 (Charakter) を解明するにあたり注目すべき取引が詳細に述べられているとして、その意義を強調する。『書簡集』5巻末から6巻に収録されている書簡に基づくサヴィニーの再構成に従いながら、以下、講演内容を紹介することにしよう。

前56年に、キプロス島の都市サラミスの使節としてその参事会員たちが、ローマでスカプティウス (M. Scaptius) とマティニウス (P. Matinius) から消費貸借を行った。サヴィニーは、タイトルでブルトゥスが背後にいることを示唆しつつも、ここでは2人の債権者を親切な (gefällige) と形容する。もともと、以下前面に出るのは、もっぱらスカプティウスである。月利4%、年利48%の利息で用立てを申し出たのである⁴¹⁾。しかし、ガビニウス法 (Lex Gabinia) に違反するおそれがあったため、契約締結が躊躇された。同法は、おそらく前67/68年に護民官であったアウルス・ガビニウスによって提案された民会議決 (Lex Gabinia de versura Romae provincialibus non facienda) であり⁴²⁾、債務者としてのローマの属州(民)の——後に扱うように——消費貸借又は未払利息の元本への組入れ (versura) がなされた債務証書 (syngraphae)⁴³⁾の効力を認めないよう裁判を司る政務官に命じるものであった。ローマ市民間の消費貸借契約に利息を付けるのに要求される問答契約は必要がないために、債務証書の効力が問題とされたのであろう⁴⁴⁾。この法律は、一般的には、刑罰の制裁も科していたとされる⁴⁵⁾。同法は、ローマにおける外交使節をめぐる弊害に対する対応の一つであった。通例の説明では、属州民がその政治的な主張を聞き入れて貰うのに、有力者に高額な賄賂を支払う必要があり、そのためローマで高利の融資を受けざるをえない状況があり、このため、最初の法律は、すでに前71年、外国の使節はローマの元老院に受け入れられなければならない、もはや個々の元老院や政務官の善意に依存する必要がないと定め、さらに、第二の法律で、この定めに遡及効を認めた。あらゆる裁判機関が、契約締結時にかかわらず、法律が禁じる貸与行為の事件について(債権者からの訴えの) 手続を拒むよう指図されたのである。法律の遡及効禁止に反

しても、こうした対応の必要が認識されるほどに悪弊が広がっていたと推測できる。単なる民間の事業展開ではない貸付実務を知ることができるのである⁴⁶⁾。このことについてのサヴィニーの所見は後に紹介する。

サヴィニーは、債権者の友人ブルートゥスが、この法律が適用されないように、二つの元老院議決を実現し、貸付けが可能になったとする。彼は、このように述べるが、前述のように、そもそもこの消費貸借の背後には後のカエサル暗殺で有名なこのブルートゥスがあり、2人の債権者は彼の手足であったと想定されるのが常であり、サヴィニーの講演タイトルにも反映されている⁴⁷⁾。

次に当時の属州の状況が説明される。キプロス島は、キリキアと共同で統治されていた。キケロの前任者であり、ブルートゥスの義父であるアッピウス・クラウディウス・プルケル (Appius Claudius Pulcher) が執政官格属州総督(前執政官)であった前52年から前51年はそうであった。彼の任期中に、スカプティウスは、騎士隊長 (praefectus) に任命され、50人の騎士を伴い、極端に厳しく債務の返済を迫り、サラミスの5人の参事会員が餓死するまでその議事堂 (curia) に閉じ込めた。

キケロは、このアッピウスの後任として、703 (前51) 年夏から 704 (前50) 年まで属州総督として統治した⁴⁸⁾。キケロはまず、属州の首都タルソスに到着する前に、サラミス市民の訴願に基づき、この暴力的な騎士団にキプロス島を離れるように命じた。サラミス市民が、キケロが任地の属州に入る前、小アジアのエベソスに到着するや代表団を派遣して彼に嘆願したほどに、支配が苛酷だったわけである⁴⁹⁾。スカプティウスはあらためて騎士隊長の任命を、しかもブルートゥスは書簡で彼らは自分の familiares——サヴィニーの表現では Unterhändler——であるとして執拗に推薦したが⁵⁰⁾、キケロは、属州で金銭取引を行う者にはその職を与えないとする自身の原則を貫いた。そして、タルソスに到着した後に、両当事者をまじえ、問題の消費貸借の返済について決着をつけようとする⁵¹⁾。ここでサヴィニーは、属州告示は最高で年利 12% の利息徴収を、しかも各年の未払利息を元本に組み入れ、再び利

息付にすることを認めていたのであり、キケロは債務が成立していた6年間につきこの告示に従う弁済をサラミス市民に要求した、とする。しかしスカプティウスの側は、債務証書 (Verschreibung) に基づき年利 48% を、しかも重利も加えて請求した。

サヴィニーは、仮に当初の元本を 1000 とすれば、キケロが認めた計算では、まだ元本の倍額 2000 に達していない額であるのに対し、スカプティウスの計算によれば 1 万 500 になるとする⁵²⁾。サヴィニーがこのような仮定の計算で利息が元本と同額以上になるかどうかと言及するのは、後の規制 (ultra alterum tantum) を念頭に置いてのことであろうか。スカプティウスは二つの元老院議決によって、契約書通りの利息の設定が適法となったと主張する。しかしこの解釈は受け入れられず、キケロは、二つの元老院議決によって、本来無効であったこの消費貸借の内容がそのまま認められるのではなく、許されていた通常の契約と同じ扱いを受けるというものであり、年利 12% の制限が適用されるとする。債権者スカプティウスは、ここで自己の主張を諦め、相手方の計算原則を認めつつ、実際の数値で対立する方向へ作戦を変更した。彼は、サラミスの側が未払債務は全額で (die ganze rückständige Schuld) 106 であるとしたのに対し、200 であると主張した。サヴィニーは、脚註で、一部返済 (Stückzahlung) が行われていたので、最初の元本額の確定は不可能だと正しく指摘しているが、後に述べるように、この点は後代の研究との関連で重要である⁵³⁾。

さて、ここでもスカプティウスの主張は旗色が悪いが、106 の受領を拒んだため、サラミス側は、神殿への寄託、つまり遅延利息が発生しないように供託を打診したところ、これをキケロは拒否する。このために、事件はキケロの属州総督時代には決着を見ることなく、言わば先送りされてしまう。前後を含めてこの供託の申し出とその拒絶の部分 (6.1.7) のテキストを、1968 年版の Bailey 版のパンクチュエーションに従って紹介すると (下線は筆者による)、
«Illud quidem fatebitur Scaptius, me ius dicente sibi omnem pecuniam ex edicto meo auferendi potestatem fuisse. addo etiam illud quod vereor tibi

ipsi ut problem: consistere usura debuit, quae erat in edicto meo; deponere volebant: impetravi a Salaminus ut silerent》「少なくとも、スカプティウスは、〔和解や仲裁ではなく〕私が判決を下すなら、私の告示に基づく全額を得るチャンスがあったと認めるでしょう。私は、果たしてあなたに信じてもらえないのではと心配なことを付け加えておきます。〔下線部邦訳中略〕（しかし）私は、サラミス市民に、黙っているように命じたのです」である⁵⁴⁾。

そして、下線部の《consistere usura debuit, quae erat in edicto meo; deponere volebant》について、サヴィニーは後にも先にもほとんど支持されていない独自の解釈を行う。即ち、ここでは、「私の告示に基づいた利息が成立 (consistere) しなければならなかった」と債権者側が主張した年利 48% ではなく、あくまで告示に従った年利 12% での利息計算を述べているとする⁵⁵⁾。これに対して、すべての解釈者 (Interpreten) たちはこの consistere を「停止する」(cessare) と理解して、神殿への寄託の効果を述べているとする⁵⁶⁾。しかし、サヴィニーに言わせれば、《consistere usura debuit》で切れるならこの理解は考えられるが、続いて「私の告示にあった」(quae erat in edicto meo) との説明があるので、「私の告示に従った利息の計算が法上当然に正しいものと解されなければならなかったのであり、この計算で、それが維持されなければならなかった」ことを述べており、供託による利息進行の停止を述べているわけではない、というのである。

管見では、このように解する近代語訳はないように思われる。もっとも、サヴィニーの名を挙げることなく、彼と同様の問題意識を持っている者もいた。1890 年出版の Tyrrell と Purser による『キケロ書簡集』3 巻では、利息を含めた消費貸借金を債権者が受領しない場合に債務者が金銭を封印して寄託した時から利息計算が進行しないとするパピニアヌス法文を挙げつつ⁵⁷⁾、consistere を cease to run と解し、しかしそのように読むために、《quae erat in edicto meo》を《consistere》の意味が理解できなかった写字生による付加であると想定し、削除を提案しているのである⁵⁸⁾。つまり、もしこの説明部分があるとするなら、《the rate of interest fixed in my edict ought to have

been maintained」との理解がありうるが、これでは文脈からして不自然で関連がないとする⁵⁹⁾。これに対して Budé 叢書の L.-A. Constans/Jean Bayet は、脚註でパンクチュエーションが不確かであると指摘して、「Consistere usura debuit: quae erat in edicto meo deponere volebant」と読み、関係代名詞節を後ろの動詞にかけ、「les Salaminieniens voulaient déposer la somme, au taux fixé par mon édit」とし、利息は停止しなければならず、だからキケロの告示にある年利 12% の利率での債務額を寄託することを望んだのだ、として une relation causale と捉える巧みな解釈を行う。逆に、このパンクチュエーションを通じてこそ consistere を「停止」と解することが補強されると考えているのであろう⁶⁰⁾。Bailey は、先にテキストを挙げたように、「consistere usura debuit, quae erat in edicto meo; deponere volebant」として、告示の部分 usura の説明と読むが⁶¹⁾、註記で、必ずしも必要はないとしつつ、「*«ea etiam» quae erat would be clearer*」として、キケロの告示が定める 12% の利息さえ停止するとした方がより明瞭であるとする⁶²⁾。Bailey は援用しないが、この etiam の挿入は、すでに、16 世紀にリエージュのシメオン・デュ・ボワ (Siméon du Bois, Simeon Boze, Simeon Bosius, 1536–1581) が、consistere について、「cessare debebant usurae」と理解し、そしてスカプティウスの主張する高利 48% だけでなくキケロの告示の 12% の利息さえも進行が停止すると解していた⁶³⁾。さらに、L.-A. Constans/Jean Bayet, Carlo di Spigno, Helmut Kasten も、停止を非現実として訳しているが⁶⁴⁾、debuit はあくまで直説法であり、サヴィニーの理解の可能性が全く否定されるわけではない。あなた (アッティクス) に信じて貰えない、あなたを説得できないとのキケロの危惧については、神殿への寄託を禁じたことに結びつけられよい⁶⁵⁾。

続けてサヴィニーは、キケロが、一方で正義の人士として、自己の告示に従った年利 12% 以上の利息を認めず、他方で、利息進行を回避する神殿への寄託を許さなかったことを、巧みな中間の道 (ein glücklicher Mittelweg) を見出した、としている。結局のところ、ブルトゥスの顔をつぶすことなどキケロには無理な相談で、万事未決のままにして、良心を持ち合わせない将

来の属州総督に、年利 48% の判断をする可能性を残した、というのである。

キケロのこの態度は、背後にいるブルトゥスを始めとする属州から利益を上げるローマの階層への配慮と、属州民の側に立った自己の正義感との狭間での妥協的なものだとの否定的評価を受けやすい。これについては、サヴィニー以後の書簡研究における評価との比較で、あらためて検討する。

サヴィニー自身は、キケロに対する自己の評価を裏づけるために、次の箇所 (5.21.12) を挙げ、これまで誤解されてきていたとする。テキストは、
 «clamare omnes qui aderant nihil impudentius Scaptio, qui centesimis cum anatocismo (ἀνατοκισμῶ) contentus *non* esset, alii nihil stultius. mihi autem impudens magis quam stultus videbatur» 「居合わせた者たちはすべて、重利での年利 12% で満足しなかったスカプティウスほど図々しいことはない (nihil impudentius) とか、それほど愚かな (stultius) ことはないとか叫んだ。ちなみに、私には、愚かというよりも図々しい (impudens) と思われた」と、本稿では後でも述べるように、キケロはまるで第三者のようなコメントを書いていることを別にすると、あまり問題はない。理解が分かれるのは、これに続く、その理由を述べる «nam aut bono nomine centesimis contentus <non> erat aut non bono quaternas centesimas sperabat.» である。Ernesti のように *non* を付加する読み方もあるが、サヴィニーを含め、大方はそうではない⁶⁶⁾。仮に「bono nomine なら年利 12% で満足し、あるいは non bono なら年利 48% を期待していた」と理解しても、サヴィニーは、これまでの説明は満足のゆくものではないとし、まずは、不正を行う将来の執政官格属州総督をスカプティウスに期待させたのだとする説明を、アルド・マヌーツィオ (Aldo Manutius) のものとして紹介し、スカプティウスの期待は疑いがないものの、キケロ自身がそれを述べているわけではないとする。これだけだと意味が分かりにくいだが、要は bono nomine と non bono の対比をどう理解するかである⁶⁷⁾。前者は、元本返済の期待が高い優良債権、後者は元本返済の見込みの低い不良債権のことであり、後者であるからこそ圧迫して 48% の利息の回収を目指し、前者の場合なら 12% の利息で満

足すると解されてきた。先に述べたデュ・ボワは、債権について *optimus* と *malus* を対比させて、訴えなければ最優良債権でさえ不良債権になるとしているコルメツラ『農業論』(1.1.7)を援用し⁶⁸⁾、元本返済の不安と関連させて、この解釈をより分かりやすく以下のように述べている。

「[キケロは]この窮地にあつて、優良債権に年利 48% の利息を期待しているスカプティウスの最大の凶々しさを非難している。優良債権に、年利 12% と重利で満足していたなら、あるいは、不良債権であつたので、元本が失われることの損失を、利息を大きくして補おうと年利 48% を引き出すのなら、慎重深い者であつたろう。しかし、凶々しくも、優良債権で 48% を請求するなど耐えがたい。この凶々しい者は、どんなに多額の利息債務を有しようとも、元本が失われる危険のない資力が十分にある債務者を召喚するのである。だから、コルメツラが述べているように、高利貸しのアルピウスは、どんなに優良債権であっても訴えなければ不良債権になると常々言っていたわけである」⁶⁹⁾。

以後、アウソニウス・ポプマ (Ausonius van Popma, 1563–1613) にも見られるように、優良債権と不良債権の対比との解釈が踏襲されるように思われる⁷⁰⁾。

このように解釈上のいくつかの問題点を指摘した後、サヴィニーはあらためて個別問題について、それぞれに自己の立場を明らかにする。

まずは、二つの元老院議決の意味として、ガビニウス法に反する消費貸借契約について、一つ目の議決が刑罰を免除すること、二つ目が訴権を与える内容であつたとし、続けて、『書簡』(5.21.12)に元老院議決の本来の文言が含まれていたわけではないと考え、内容として、「この契約書が他の契約書と同じ法に服することになるように」(ut eodem iure ea syngrapha esset quam ceterae syngraphae)であつたということであり、これは年利 48% の消費貸借契約通りではなく他の契約と同様に年利 12% の制限を受けるという意味である、とする。スカプティウスは、第二の元老院議決が契約書の内容そのものを有効にしたと解したが拒否される。逆に言うと、債権者側の主張が全くナンセンスであつたのでなければ、元老院議決が別様の解釈の余地を残すような表

現であった可能性がある、ということであろう。

そして、ガビニウス法が、属州都市の使節 (Bevollmächtigten) がローマで締結する金銭債務について刑罰をもって禁止し、訴権を与えなかったことにつき、サヴィニーは、おそらく金銭消費貸借により属州民が、ローマの有力者たち (die Römischen Grossen) を買収しローマに損害を与えること、あるいは有力者が属州民から金銭を搾り取ることを容易にする危険を防止するためである、と二つの側面から解釈している。ローマでの議員への取成しのための賄賂として、属州民には金銭の調達が必要であったとする一般の所見はすでに見たが、ここでサヴィニーは、買収によりローマの国政が損害を被るという、より抽象的な問題点を指摘している。同時に、共和政末期の元老院議決が、一般的な規範定立というよりも、有力者の事情からの法律の不適用を行っている実際例を知ることができる。

このような議論の筋道をサヴィニーは、ハンブルク出身でレイデン大学教授として活躍しグロティウス『戦争と平和の法』の校訂者としても名高い 17 世紀の文献学者の Johann Friedrich Gronovius (Johann Frederik Gronow, 1611–1671) から採用する⁷¹⁾。事実、Gronovius は、古代の利息に関する二部作の第二作において、キケロの書簡を詳しく論じていた⁷²⁾。彼は、ガビニウス法の内容についての 16 世紀フランスの人文主義法学者バルナベ・ブリソン (Barnabé Brisson, Barnabas Brissonius, 1531–1591) の解釈を批判しつつ、この法律は利率の問題に言及することなく、ローマで属州民に消費貸借金を与えた者と受領した属州民双方に対する罰を規定していたが、元老院議決によって年利 12% が認められたとしていた⁷³⁾。実は、ブリソンの想定は彼以前にも解釈者たちに採用されていた⁷⁴⁾。

いずれにせよ、Gronovius は、ガビニウス法についても、さらには元老院議決についても、以下のような簡潔で正確な解説を行っていた。つまり、「ガビニウス法は、いかなる属州の使節にもローマにおいて利息付で消費貸借金が与えられてはならず、そして、属州の政務官は、属州民が債務を弁済していないと自らに訴えたときにそうした債務証書に基づいて裁判を行ってはな

らない、と定めていた。これに対して、かの元老院議決は、サラミス市民に利息付で金銭を貸借した者がガビニウス法の罰金を科されることはないとして定めていただけであり、この元老院議決では、ガビニウス法に反して、属州総督が、そうした債務証書〔内容〕に基づいて裁判を行うことを定めていたわけではない⁷⁵⁾というのである。サヴィニーによれば、この禁止にケクロが挙げていたのはガビニウス法ではなく属州告示であるとする。ガビニウス法は高利の規制に関係がないことからこの想定のは誤りであるとするが、このことは、先に見た、「*consistere usura debuit, quae erat in edicto meo*」のサヴィニーの理解を部分的に支えるようにも思われる。いずれにせよ彼は、この誤りが、Gronovius 以後 Ernesti や Schütz によっても主張され、そのためにテキストの修正にまで及んでいることを非難する。なるほど、新約聖書研究で知られるライプツィヒの教授 Johann August Ernesti (1707-1781) は、『書簡集』(5.21.12)において、「*quod lex Gabina vetabat [e syngrapha ius dicere]*」として「債務証書に基づき判決を下す」という法律の内容を述べる部分の削除を提案した上で、利率の規制を想定していた⁷⁶⁾。

第二に、サヴィニーは *versura* 又は *versuram facere* の理解をめぐる議論に入る。これは、法律文献には確認できず、狭義の法律専門用語ではないものの、史料に頻繁に見られ、主に、その意味するところが、「金銭消費貸借」一般なのか、あるいは、先に訳したように、より限定的に、旧債権者が満足を得て新債権者が生じ、旧債務の利息が新債務の元本に組み入れられることにより債務者にとって実質的には重利の負担となるような消費貸借のみなのかをめぐって争われてきた⁷⁷⁾。

キュジャースは『「パピニアヌス質疑録」註解』(ad D.22.1.1)で、ローマの利息規制の歴史を述べる際に、我々のケクロ『書簡集』(5.21)の言及するガビニウス法が年利 12% の規制を述べていたとするのは誤りであることをすでに指摘し、この法律は、利息ではなく *versura* についてであり、ここでの規制は利息付の金銭消費貸借契約の変更 (*mutatio pecuniae sub usuris*) に関わるもので、二つの脱法行為として、重利 (*ἀνατοκισμός*) と *versura* を並べ

ている。そして公然と (palam) 重利を支払うことができないが、しかし別の債権者に支払うことによって、隠秘に (clam) 債権者に支払うことになる。これが *versura* であり、キケロはこのことを *eleganter* に示している、とまさに *eleganter* に説明していた⁷⁸⁾。サヴィニーはさらにファブロ版やナポリ版全集 10 巻所収のキュジャース『註解』(ad D.22.1) も援用する。ここでもキュジャースは *versura* が一般的な消費貸借とも高利の消費貸借とも異なり、ガビニウス法が厳しく *versuram facere* を禁じているのは、何か不正が内在しているはずであり、迂回しての (per obliquum) 重利の取得と考えているのである⁷⁹⁾。これに対して、サヴィニーはキュジャースの説を退け、*versuram facere* が通常の消費貸借を表現していたことを証明したとして、この点については、Gronovius に与する。キュジャースは通常の消費貸借なら無条件に禁止されたりするはずがないとの想定であるが、サヴィニーはキケロの時代にはそもそも重利ですら完全に許されていたのであり、重利を隠蔽する行為についての禁止など考えられない、と考えているのである。

第三に、サヴィニーは、スカプティウスがキケロの前任属州総督アッピウスから得ており、スカプティウス本人の請求やブルートゥスからの推挙にもかかわらずキケロが継続を認めなかった隊長職 (*praefectura*) の性質について問題にする。ここでもマヌーツィオの説明が批判対象となる。マヌーツィオは、騎士隊長、今日の予備役に近い古参兵の隊長、属州総督が常に滞在できるわけではない都市における裁判官、工兵隊長の四種類の *praefectus* を想定し、ここで問題の官職は、裁判官職であるとし、スカプティウスは消費貸借をめぐる自らの事件の裁判権を得ようとしていたとするのである⁸⁰⁾。

しかしサヴィニーはこの解釈を退け、あくまで執行の局面で実力を行使する騎士団長であったとする。何よりも、イタリアでは自治都市や植民都市に対して、ローマから送られた隊長 (*praefectus*) が裁判権を行使することがあったものの、属州にはこのような裁判権を有する騎士隊長職がなかったからである、と共和政ローマの国制に関する知識を披露し、すでに公刊されていた自身の『中世ローマ法史』1 巻 14 節を援用する⁸¹⁾。属州では最高の裁判権は

総督にあり、彼は自身で直接に又は代官 (legatus) に委託してその権利を行使し、代官が権利を行使する境界や期間は総督が恣意的に決め、マヌツィオの想定する官職 (Würde) は確認できない、とする。キケロ『書簡集』(5.7)で、«quinos praefectos delaturum novos vacationis iudiciariae causa ...», つまりポンペイウスが「裁判人の職務を免除する目的で、5人ずつ新たな隊長を任命するつもりである」と述べていることについても、サヴィニーは、騎士隊長に、私人として裁判権を委ねることがあり、最初からそうした官職が存在するわけではない、と解答する。

第四に、なるほどローマ法は後になると重利を禁じるが、キケロの時代には、重利は許されていた、とすでに *versura* の解釈で述べていたことを繰り返す。サヴィニーが明白な証拠として挙げている箇所は、『書簡集』(5.21.11)の「この〔債務総額計算の〕間、私はといえば、すでに〔これまでの総督から引き継がれた〕踏襲的告示にあるように1年たてば重利となる年利12%を守っていたのだが」(Interim cum ego in edicto translaticio centesimas me observaturum haberem ... cum anatocismo (ἀνατοκισμῶ) anniversario) である。そしてここでの形容詞 *anniversarius* につき、Ernesti は、そして彼を支持して Schütz は、他の箇所には見られず、重利 (anatocismus) の表現に当然に内在していると考えていたが、利息を月利で計算し支払っていたローマ人にとって、月毎に未払利息を元本に組み入れることもありえたとして削除提案を否定し⁸²⁾、これは後に見る Sternkopf にも支持される⁸³⁾。それどころかサヴィニーに言わせると、Ernesti は重利の性質を毎年定額が元本に加えられるとしており正確に理解していなかった、というのである⁸⁴⁾。

第五に、サヴィニーが言及するのは、『書簡集』(6.1.5)の「毎年更改すること、6年間年利12%の利息で弁済するように、私は手筈を整えた」(Confeceram, ut solverent centesimis sexennii [bienni] ductis cum renovatione singulorum annorum) である。そして、キケロは、タルソスでの会合は前51年末で、最初に消費貸借契約が締結されたのが前56年であるから、ここでの6年はおおよそということであろう、とサヴィニーは単純に解説する。56年以降に、更

改,あるいは未払利息の元本への組入れなどがあり,キケロの面前での最終的な会合の直近の契約からだとも6年よりもずっと短期のはずである。このため,例えば,ローマ数字での *iienni* (2年) が *vienni* (6年),つまり *ii* が *vi* と誤写されたとして,2年とする Sternkopf に代表される異読があり⁸⁵⁾,決定的というわけではないが,近代の主要な叢書でも採用されている⁸⁶⁾。これに対して,6年を正当化するために,すでにマヌーツィオは、『書簡集』(6.1.7)の計算の下りで「*a proxima quidem syngrapha*」(直近の消費貸借契約から)と書かれているのを,「*a prima quidem syngrapha*」(最初の消費貸借契約から)の計算と読んで解決を図っていたが⁸⁷⁾,サヴィニーは,キケロがこの書簡(6.1)を書いたときには,重要でない些細なことにつき正確に記憶していなかったと想定するのが自然であるとして,ここでも単純に解決している。

3 サヴィニー以後の書簡研究

以上,サヴィニーの講演を,時に彼以降の理解に言及したものの,主として彼以前の解説と比較して紹介した。すでに述べたように,Sternkopf は1900年に「ブルートゥスの暴利」(*Der Zinswucher des M. Brutus*)を公にしたが,それはBardtが1898年に,そしてローマ法とローマ史の碩学 Mommsen が1999年に公表した,いずれも同じタイトルの比較的短い論稿を受けてのことであった⁸⁸⁾。以下,これまで見てきたサヴィニーのキケロ書簡解説の特徴を浮かび上がらせることを主な目的として,BardtやMommsenの所説も比較しつつも,主としてSternkopfを若干詳しく紹介しよう。

Sternkopfは,前67年の平民会議決であるガビニウス法は,ローマにおける外国使節への消費貸借契約につき,両当事者に対する刑罰と契約の無効の二つの制裁を定めていた,と通常の説明を行う。そして,論稿のタイトルが示しているように,BardtやMommsenと同じく,この消費貸借につき,マティニウスとスカプティウスはダミー(*Stromänner*)であり,ブルートゥス

こそが貸主であると考えている⁸⁹⁾。ガビニウス法に対する二つの元老院については、最初の議決によって当事者は刑罰を免れることになり、第二の議決によって消費貸借契約が訴求可能となったとの説明も、すでに見たサヴィニーの説明に一致する。

Bardt は、最初の消費貸借の元本は約 $53\frac{1}{2}$ (53.6) タレントで、年利 12% で重利が約束されており、最後の債務証書交付時つまり最初の契約から 3 年 9 か月 ($3\frac{3}{4}$) 後に 82 (82.0815) タレントになっていた、とする。つまり、彼は、最後の債務証書からタルソスにおけるキケロの面前での審理までについては、 $106 = C \cdot 1.12^n$ と $200 = C \cdot 1.48^n$ の数式から、最後に交付された債務証書の債務額は $C = 81.882$ 、期間は $n = 2.278$ (年) であると算出し、さらに最初の元本は 53.6 だったと計算するのである⁹⁰⁾。しかし、Sternkopf によれば、これは信じられない。サラミス市民は、常に完済していたわけではないものの、最初は年利 48% の利息を弁済していたと想定する⁹¹⁾。しかも、Sternkopf によれば、年利 48% で重利が想定され一度も返済が行われていないなら、債務証書が新たに交付される必要はなかったから、最初の契約ではそもそも重利ではなかった、というのである。このように、Bardt の立てた数式自体は不当であり算出は無意味となる⁹²⁾。ちなみに Mommsen は、最初の元本を 12 とし、月利 4% の月毎の重利が 4 年と 2.03 か月で 85.4 となり、これが月利 1% の月毎の重利が 1 年と 9.7 か月で 106 に、4% の月毎の重利で同じ期間で 200 となるとしている。月利の重利だとする想定に対する批判は後に扱うことにして、これにも同様の非難が可能である⁹³⁾。なるほど、全部であれ一部であれ、ある期間に利息が支払われ、残額を計算し、あらためて未払利息を組み入れて額を確認し、債務者に有利な利率に変更し、新たな債務証書が交付されることは十分考えられるが⁹⁴⁾、キケロと異なり、債権者側に立つ属州総督の任期中にこうした想定をすることには無理があろう。

そして、すでにサヴィニーの説明の箇所で述べたように、Sternkopf は、sexenii つまり vienni は、bienni つまり ienni からの誤記であったと推測する⁹⁵⁾。いずれにせよ、Sternkopf によれば、前 56 年の消費貸借の元本額は確

定できず、サラミス市民は常に利息を完済していたわけではなく、全く未払であったわけでもない。続けて、最後の債務証書交付の時期も不確定であるが、おそらく前 52 年であったろう、とする。この時から前 51 年半ばのキケロ到着まで前任者の者で債権者は高圧的であったが、債務者は弁済せずに持ちこたえ、年利 12% で重利の弁済をするつまり 106 を支払う用意があった、というのである⁹⁶⁾。

Sternkopf は、サヴィニーが指摘していなかった、サラミスの事件を述べる直前に書簡の中でキケロが書いていたこと (『書簡集』 6.1.3) を、教えられるところが多いとして引用する。つまり、カッパドキアのアリオバルザネス王 (3 世) が、30 日毎に、全額ではないが利息の一部だけを弁済し、債権者はそれを寛大に (clementer) 扱い、元本未払にも満足している (contentus est) とする箇所である⁹⁷⁾。なるほど、この援用によって、すでに見た、優良債権、不良債権の対比、及び形容詞 anniversarius についての理解がより容易になる⁹⁸⁾。Sternkopf は、直近の債務証書 (proxima syngrapha) から、繰り返し債務証書が交付されていたことを想定しなければならない、としている。実際、アリオバルザネス王のように、利息の一部弁済であっても、既払利息と未払利息が正確に計算された上で債務証書が新たに交付されることは、債務者であるサラミス側にとっても意味があったであろう。この債務証書の交付が、属州総督がキケロの前任者でブルトゥスの義父アッピウスであった時か、さらにその前任者レントゥルスの時であったか、つまり前 56 年から前 53 年なのか前 53 年から前 51 年のことなのかは述べられていない。しかし Sternkopf は、スカプティウスを騎兵隊長に任命したのはアッピウスであり⁹⁹⁾、スカプティウスはサラミスの 5 名を閉じ込め餓死させたことや、キケロは前 51 年に属州に到着すると直ちに騎士団に島からの退去命令を下しているといったアッピウスの時代の交付を推測させる事実を指摘する。

Sternkopf は、以上の説明の後、サラミス市民が債務支払を申し出るが、この支払はキケロが彼らに免除した租税がその財源となるとの、ここでもサヴィニーが言及しない重要な事情を述べている¹⁰⁰⁾。このことは債権が優良で

あることの証左となるだけでなく、キケロの態度について、なるほど自慢話だと捉えることもできようが、しかし後に述べるように、弱者に対するキケロの行動をあまりにも否定的に捉える Mommsen に反対する Sternkopf の所見を支えるものである。一方、すでに『書簡集』(5.21.11)でタルソスでの両当事者との最初の会合で、スカプティウスによる不法侵害について聞き入れなかった冷淡な態度 (Multa de syngrapha, de Scapti iniuriis. Negavi me audire) も忘れてはならないと思われる。

続けて、Sternkopf は、重利で年利 48% の請求を認められなかったスカプティウスが、重利で年利 12% の計算方法そのものは認めつつ¹⁰¹⁾、具体的な金額で勝負するように作戦を変更したことを指摘し、この点からも Bardt の主張をありえないと批判する。そして、Sternkopf は、キケロが債務総額を訊ねるために別々に呼び出したところ、スカプティウスは 200、サラミス市民は 106 と答えたのに対して、両者を同席させ計算させると額は一致したので¹⁰²⁾、サヴィニーが述べていたように、サラミス側が神殿への寄託つまり一種の供託を申し出た経緯を説明し、その後の書簡の文面を掲載している。この寄託を認めないようにとするスカプティウスの頼みを、先に述べたように、キケロは図々しいと考えたが、債務者の提案を退け、応じてしまう¹⁰³⁾。居合わせた者はすべて、年利 12% の重利で満足しない債権者に対し、こんな図々しいことはない、こんな愚かなことはない、と叫んだとの事実を伝えた後、愚かというよりも図々しいと思われた、と先に述べたように、キケロがまるで第三者のようなコメントを書いていることを指摘する。ここでも Sternkopf は、キケロの態度や性格を評価するための重要な箇所を掲載している。

続けて、bonum nomen と non bonum nomen の理解について、crux interpretum であると表現して¹⁰⁴⁾、この理解のために援用されてきた、前 62 年末頃の『親類・縁者宛書簡集』(5.6.2) が引用される¹⁰⁵⁾。書簡のこの箇所で、キケロは、これまでの自身の実績から (meis rebus gestis)、優良債権 (bonum nomen) つまり返済が確実な優良債務者と評価されるにいたり、年利 6% の利息で高額の借入れが可能になったとしている。ここから、債務者であるサラミスの

財政状況による区別、つまり元本回収が確実であれば 12% で満足し、そうでなければ年利 48% を要求するとのサヴィニーの説を紹介し、Sternkopf は、消費貸借が更改されずに元本が請求されることを回避するために、サラミス側が高利を受け入れたとのサヴィニーの解釈の流れを解説する。

しかし、そうだとすると、Johannes Boot (1811–1901) の提案するように、「満足するであろう」(contentus erat) を未完了過去形「満足していた」(erit contentus) へ修正する必要がある¹⁰⁶⁾。そして Sternkopf 自身は、bono nomine を債権者にとって好ましい債権、つまり 200 の債権額のことであると解釈し、それなら 12% の利息計算で、これに対して non bono nomine つまり債権額 106 なら 48% の利息計算で満足する、と未来形が維持できる解釈を提示し、bonus の対比で parvus が用いられているキケロ『喜劇俳優ロスキウス弁護論』(1.4) の「額の少ない債権なら帳簿に書いておかないのか」(non refert parva nomina in codices) を援用する。いずれにせよ、スカプティウスの請求は図々しい、ということになり、類似の理解は Tyrrell/Purser にも見られるとする。つまりスカプティウスの 200 との請求を認めるなら (bono nomine) 利息 12%、請求を争うなら (non bono nomine) 利息 48% を主張するというのである¹⁰⁷⁾。確かに、non bonus の理解につき、弁護論の箇所が援用されるのは目新しく巧みである。最初の債務額を求めようとする Bardt の計算について、Sternkopf は、先に述べたように債務が全く弁済されていないとの前提自体を批判していたが、再び、ギムナジウムの教師らしく、数学担当の同僚の助けを借りて、あらためて Bardt の想定を非難し、スカプティウスに騎士団を用いることを許していた属州総督アッピウスの支配下という有利な状況において年利 12% で満足することはありえず、直近の債務証書の交付時期も不確実であることを加え¹⁰⁸⁾、自身の結論を繰り返す。

次いで、Sternkopf は、自身の論稿が完成した段階で、1899 年に雑誌 *Hermes* に掲載された Mommsen の論文を知り検討を加えた事情を述べる¹⁰⁹⁾。そして、Mommsen が、Bardt と同じく、過去に利息が支払われたことがないと想定していることのほか¹¹⁰⁾、常に重利を前提とし、faenus perpetuum の

perpetuum を月毎の重利と理解して債権者に有利であり、in singulos annos renovatum や anatocismus anniversarius を年毎の重利であり債務者への圧迫が少ないと誤解している点を批判する¹¹¹⁾。そして、これは perpetuum を、重利ではない、つまり元本への組入れが行われなとのマヌーツィオ以来の理解とは異なること、のみならず、Mommsen 自身も一度は受け入れていたはずの解釈に反していることが指摘される¹¹²⁾。Sternkopf によれば、renovatum だけでは未払利息の元本への組入れの期間が月毎なのか年毎なのかが分からず、そのため in singulos annos といった期間の定めを加えなければならず、逆に perpetuum は重利でないのでそうした付加的な説明が不要なのである。

続けて、キケロは、自分が未決のままにしてブルートゥスの意向に添ったことを、率直に友人のアッティクスに語っている箇所を指摘する (5.21.13)¹¹³⁾。これをキケロの後悔と受け取るなら、これもキケロに対する厳しすぎる評価の緩和に働くのであろう。

さらに Sternkopf は、サヴィニーが「成立する」と理解したが、一般的に「停止する」と理解した先に挙げた箇所 (6.1.7) の «consistere usura debuit» を、「停止させるべきであった」、とキケロの後悔ともとれるように理解し、ここまでの譲歩はすべてブルートゥスのためであったとアッティクスに語っている (6.1.6) こと (Sed totum hoc Bruto dedi) を指摘し、Mommsen はこの箇所を見逃している、とする。他方で、「愚かというよりも図々しいと思われた」とのキケロの第三者的な所見を見逃していないことを照らし合わせると、Sternkopf の指摘の方が、バランスのとれた評価であると思われる。また、Mommsen が centesimis sexinii ductis (6.1.5) と «centesimis ductis a proxima quidem syngrapha» (6.2.7) との矛盾を調整しようとしなことを非難し¹¹⁴⁾、すでに述べたように、sexennii (viennii, 6 年) ではなく biennii (iiennii, 2 年) との異読を想定しなければならないとする。

事実、Mommsen は、「キケロは、不法そのものではなく不法が赤裸々になることを恐れ、実直であることではなく実直であるという評判を気にする

中途半端な輩である。彼は、そういう連中が常であるように、自分のことを心底よく知っており、また知られていることを自覚している者たちに対しては、経済的弱者の正しい保護者として振る舞うのである」、と彼らしい手厳しい評価を下しているが¹¹⁵⁾、Sternkopf は、キケロが生きた時代背景を無視してあまりに厳格な正義を要求し、道徳的に断罪する Mommsen の態度を非難し、別の関連で『親類・縁者宛書簡集』（5.6）においてキケロについて述べる Gaston Boissier による、キケロが生きた時代を斟酌すべきだとする所見を正当であるとして指摘する¹¹⁶⁾。

最後に、サラミス市民のその後につき報告が残されておらず、Sternkopf は、元老院議決が彼らの助けとなるとの希望的な観測を述べつつも、万事将来の属州総督にかかっているとのキケロの不安を紹介し、アジアにおける内乱の最初の年にあった状況は何ら良いことを推定させるものではないとする¹¹⁷⁾。実際、Bardt も、論稿の末尾で、キケロが総督の任を終えるや否やブルトゥスがアジアに赴いたことから悲観的な想像を述べていたが、こうした所見は十分に根拠があると思われる¹¹⁸⁾。

おわりに

サヴィニーは、『現代ローマ法体系』1巻において、現行法学者として法源としての慣習法の要件を明確にする中で、商慣行による重利を承認し、僅かな判例の比較によるのではあるが、立法によらずに以後の判例法の確立に影響を与えたように思われる。また、地方自治体と自治体の組合の精算をめぐる商事ではない事件について未払利息の組入れを認めなかった以前の判例は、判決債務を元本債務と利息債務に厳格に分けていたサヴィニーの学説に親和的である。

『体系』1巻の出版以前に、サヴィニーは、古典教育重視のベルリン大学への移籍後の講演で、共和政末期の重利慣行を伝えるキケロのアッティクス宛書簡を取り上げ、ルネサンス以後の代表的な解釈を周到に検討しつつ、後

にカエサル暗殺者として歴史に名を残すブルートゥスの存在が背後に確認できるキプロス島サラミス市民の貸金返済事件の解説を行った。書簡に対するその後の研究は、サヴィニー独自の *consistere* の理解を全く受け入れないが、彼の疑問に答えるような読み方を提案している。彼が講演で具体的に解答を与えなかった、当初の、そして最後の債務証書における債務額や契約内容が探求され、債権者側に対するスタンスを素材にキケロに対する評価が下された。しかし、額や内容については、サラミス市民がどの程度返済していたかが分からないために復元は不可能であるとする、サヴィニーの妥当な判断が浮き彫りになったように思われ、また、評価についても、特に Mommsen と比較するとき、「巧みな中間の道」をとったと述べるにすぎないサヴィニーの判断が穏当であろう。弁護人としてのキケロに対するサヴィニーの評価に、別の側面からのキケロに対するこの評価を加えることができよう。ローマ法の重利に関する二つの領域についての覚書であり、両者をあえて結びつけることはしないが、サヴィニーを評価し位置づけるにあたって、彼が、古典文献学やローマの国制にも通じていたことのみならず、とりわけ、研究対象に細心で周到であると同時に、史料から正確な解答が見込めない問題については賢明な距離を置き、時には解答が見込めない問題に拘泥しないバランスのとれた研究態度をとっていたことを承知しておくことも必要であろう。

註

- 1) Friedrich Carl von Savigny, *System des heutigen römischen Rechts*, Bd. 1, 2. Aufl., Berlin 1840, Aalen 1981, S. 66-76 (§. 17), S. 222-290 (§. 35-§. 45). 歴史的との形容詞は多義的であり、またここで言う歴史的方法と体系的方法は、ローマ法大全の収録法文の理解と適用を念頭に置いたもので、規範命題が簡潔に示される今日の法規解釈をめぐる我が国の法学方法論における用例とは一致しない。拙稿「一五世紀普通法学の法解釈方法論の一端——コンスタンティヌス・ロゲリウス『法解釈論』覚書——」(金山直樹編『法における歴史と解釈』法政大学出版局〔2003〕13-92頁)。広い射程での法解釈あるいは法規解釈については、磯村哲「法解釈方法論の諸問題」『現代法学講義』有斐閣(1978)85-124頁、石部雅亮「法律の解釈について——サヴィニーの解釈理論の理解のために——」(原島重義編『近代私法学の形成と現代法理論』九州大学出版会〔1985, 1996〕)57-117頁、同「法解釈方法の比較史」『南山

大学ヨーロッパ研究センター報』16号 1–14頁, 青井秀夫『法理学概説』有斐閣 (2007) 451–590頁を参照。

- 2) Savigny, *System*, Bd. 1, supra not. 1, S. 259–260. この対立は人文主義法学・復古学派以降, より鮮明に意識されるようになる。J. L. Barton, Gentilis and the interpretatio duplex, A. D. E. Lewis/D. J. Ibbetson, *Roman Law Tradition*, Cambridge 1994, p. 104–118. もっとも, 歴史的解釈が人文主義法学によってようやく始められたわけではなく, すでに最初の註釈学者であるイルネリウスが lex regia によって立法権が皇帝に移転したことに抵触する法文 D. 1.3.31 に歴史的解釈を行っていたことはつとに知られている。F. C. von Savigny, *Geschichte des römischen Rechts im Mittelalter*, Bd. IV, 2. Aufl., Heidelberg 1850, Darmstadt 1956, S. 458–459, Ms. Par. 4451.
- 3) Franz Wieacker, *Textstufen klassischer Juristen*, Göttingen 1960 及びマリア・テレーザ・ヒメネス=カンデラ (田中実・佐々木健訳)「テキストとコンテキスト: 日常生活の法律碑文」『南山法学』44巻 1号 (2020) 139–149頁を参照。
- 4) F. C. Savigny, *Geschichte des römischen Rechts im Mittelalter*, Heidelberg 1. Aufl., 1815–1831, 2. Aufl., 1834–1851.
- 5) 小品であるが, 彼の Lebenslauf について, Iris Denneker, *Friedrich Karl von Savigny. Preußische Köpfe. Politik*, Berlin 1985 が読み物としても楽しく, こうした変遷につき考えさせてくれる。方法論をめぐる研究史, 及びサヴィニーの変遷については, Aldo Mazzacane (Hrsg.), *Friedrich Carl von Savigny: Vorlesungen über juristische Methodologie 1802–1842*, Frankfurt/M. 2004, S. 6–56 の明晰なまとめを見よ。
- 6) Anatocismus という専門用語は, ギリシャ語 ἀνά と τόκος 由来の τοκίζω の合成語からの表現で, 共和政末期に現れるとされる。E.g. Cicero, *Epistulae ad Atticum*, (以下, 原文引用や刊本・研究書の書名などを除き Atticum と略称) V. 23, cum anatocismo anniversario. キケロが perpetuo foenore と称する fortlaufende の利息が対立概念である。Mommson が異なる解釈を行ったことについては後述する。あるいは, Atticum, VI. 2, «nec perpetuis, sed renovatis quotannis scil. centesimis», Atticum, VI. 1. «cum renovatione singulorum annorum». この重利は帝政期に制限され (D. 12.6.1.26.1, D. 22.1.1.29, D. 42.1.1.27), そして最終的に禁じられた。Wilhelm Rein, *Das Privatrecht und der Zivilprozeß der Römer von der ältesten Zeit bis auf Justinian*, Leipzig 1858, Aalen 1964, S. 627, 640–643.
- 7) この巻は, カラカラ帝の単独統治時に作成され, 213年の作品だと想定されている。Tony Honoré, *Ulpian. Pioneer of Human Rights*, 2ed., Oxford 2002, p. 162–169.
- 8) H. Modestino (Jorge Adame Goddard (not. y tr.)), *Respuestas*, México 1987.
- 9) Honoré, *Ulpian*, supra not. 7, p. 137.
- 10) マルキアスス『法学提要』の成立時期に関する Ferrini 以降の議論については, Domenico Dursi (ed.), Aelius Marcianus. *Institutionum libri I–V. Scriptores iuris*

romani 4, Roma 2019, p. 23–25 を参照。

- 11) 例えば、重利規制の歴史については、小野秀誠『利息制限法と公序良俗』（信山社〔1999〕）66–69 頁のほか、差し当たり Christian F. Glück, *Ausführliche Erläuterung der Pandecten*, Bd. 21, Erlangen 1820, §. 1136, S. 115–126 を見よ。簡潔に歴史を述べる教科書としては、Edoardo Volterra, *Istituzioni di diritto privato romano*, Roma 1993, p. 483–484 を見よ。彼は、本稿で扱う Cicero, Atticum, 5.2.13 から、利息を単利で計算すべしとした元老院議決も指摘し、この禁止が 3 世紀には厳格に適用されたとする。M. Kaser/R. Knütel/S. Lohsse, *Römisches Privatrecht*, 21. Aufl., S. 217, München 2017 は、債権者の交替による重利の脱法行為 *versuram facere* にも言及する。この用語、表現については後註 77 及び対応する本文を見よ。
- 12) 利息禁止の関連で註釈が付されておらず、適用をめぐり議論となるのは、Nov. 121 である。Vgl. Glück, *Pandecten*, Bd. 21, supra not. 11, S. 103 ff. もっとも、Theodor Mommsen, *Römisches Staatsrecht*, 3. Bd. 2. Teil, 3. Aufl., Berlin 1888, Graz 1953, S. 1237 がキケロ『アッティクス宛書簡集』（Cicero sagt ad Att. 5.21.13）から元老院議決を一般的な重利禁止としているのは疑問である。
- 13) Savigny, *System*, Bd. 1, supra not. 1, S. 177–180.
- 14) 慣習法の要件は、普通法学においてその証明問題と密接に関わる。Wolfgang Wie-gand, *Studien zur Rechtsanwendungslehre der Rezeptionszeit*, Ebelsbach 1977, S. 93–124, [Consuetudo est facti] では、裁判官には公知である (*notoria*) ものの当事者が援用しない慣習法の効力が問題とされ、例えば *anglica et francia* で公知の長子単独相続慣習法の主張立証を不要とする学説など普通法学の議論が紹介されるが、*opinio necessitatis* に関しては、むしろ Georg F. Puchta, *Das Gewohnheitsrecht*, 2, Erlangen 1837, S. 37 が中世法学を指摘しており、すでに Azo, *Lectura in Codicem*, 8. 52 [Quae sit longa consuetudo] の «... si populo vel praesidi placuerit, vel alii cuilibet iudici, uti iudicare [iudicari] in futurum, id est, ut sic de caetero semper fieret, et dic fieret consuetudo ...» などが将来への拘束力と慣習法の関連を議論している。
- 15) Alexander Tartagnus Imolensis, *Consilia*, vol. II, Venetiis 1578. «... dictae conventiones et capitula stante dicta consuetudine imortant quod intelligatur esse concessum Iudaeis posse etiam exigere usuras usurarum, et eas retinere et principem volentem ut decet servare conventa non debere Hebraeum praedictum ex praemissis punire». Vgl. Hermann Lange, Das kanonische Zinsverbot in der Consilien des Alexander Tartagnus, in: Winfried Trusen et al. (Hrsg.), *Recht und Wirtschaft in Geschichte und Gegenwart, FS für Johannes Bärman*, München 1975, S. 101–112.
- 16) J. A. Seuffert (Hrsg.), *Archiv für Entscheidungen der obersten Gerichte in den deutschen Staaten*, Bd. 2, München 1849, Nr. 149, S. 191–192.

- 17) 当時の判例の位置づけなどについて、鈴木康文「19世紀前半における判例についての覚書」『修道法学』40巻2号(2018)295–315頁を、裁判所の組織については、小野秀誠『ドイツ法学と法実務家』信山社(2017)4章「ドイツの最上級裁判所の変遷」を参照。
- 18) J. A. Seuffert (Hrsg.), *Blätter für Rechtsanwendung zunächst in Bayern*, Bd. 88, Erlangen 1843, S. 413–414, Nr. 5.
- 19) Eduard F. Souchay, *Anmerkungen zu der Reformation der freien Stadt Frankfurt*, Bd. 1 (Vertragsrecht), Frankfurt/M. 1848, S. 265, Ref. 2.11.10, III. Anatocismus.
- 20) *Wochenblatt für merkwürdige Rechtsfälle in actenmäßigen Darstellungen aus dem Gebiete der Justizpflege und Verwaltung zunächst für das Königreich Sachsen*, Jahrgang 3, Nr. 8, Leipzig 1843, S. 23. «Was aber die Zinsen von Zinsen anlangt, so fehlt es bis jetzt an einem positiven Gesetze, nach welchem eine Handels=*usance* der behaupteten Art, (daß nämlich die Zinsen am Ende jeden Jahres zum Capitale geschlagen würden) und eine willkürliche Zusicherung solcher Zinsen von Seiten des Schuldners als rechtsbeständig anzuerkennen wäre . . . »
- 21) K. F. Hufnagel, *Mittheilungen aus der Praxis der württembergischen Civilgerichte*, Tübingen 1848, Nr. 52, S. 245–252. さらに、フランス民法適用地域において、仏民法 1854 条につき予め元本へ組み入れる旨の合意の効力を認めなかった 1881 年 11 月 9 日帝国裁判所の判例 (RGZ 6., 325) がある。
- 22) Souchay, *Anmerkungen*, supra not. 19, S. 264, Savigny, *System des heutigen römischen Rechts*, Bd. 6, 2. Aufl., Berlin 1841, Aalen 1982, S. 412.
- 23) 19 世紀における利息制限撤廃の学説潮流に対する、判例実務の慎重な態度については、Klaus Luig, *Vertragsfreiheit und Äquivalenzprinzip im gemeinen Recht und im BGB. Bemerkungen zur Vorgeschichte des § 138 II BGB*, in C. Bergfeld (Hrsg.), *Aspekte europäischer Rechtsgeschicht. Festgabe für Helmut Coing zum 70. Geburtstag*, (Ius Commune. Sonderhefte, 17), Frankfurt/M. 1982, S. 171–186 を見よ。重利をめぐる現行ドイツ法については、独民法 289 条、独商法 355 条、353 条 2 文、及び K. Schmidt, *Das Zinseszinsverbot – Sinnwandel, Geltungsanspruch und Geltungsgrenzen –*, in: *Juristen Zeitung*, 37 (23/24), S. 829–835 を参照。
- 24) 本稿では、この論集を利用する。Savigny, *Vermischte Schriften*, Bd. 1., Berlin 1850, S. 386–406.
- 25) cf. M. Lowry, *The World of Aldus Manutius: business and scholarship in Renaissance Venice*, Oxford 1979.
- 26) サヴィニーが扱っている書簡は、Cicero, *Atticum*, 5.21, 6.1–3 である。『アッティクス宛書簡集』のテキスト伝承については、Cicéron (L.-A. Constans (tr.)), *Correspondance*, tom. I, Paris, Introduction, p. 26–42 を見よ。1470 年に Venezia と Roma で

別々に出版された二つの editio princeps から、Aldo Manuzio (Venezia 1513, 1521), Paolo Manuzio (Venezia 1551), Ioannes Georgius Graevius (Johann Georg Greffe) (Amsterdam 1684), Johan Cornelis Gerard Boot (Amsterdam 1865), Tyrrell/Pulser (Dublin 1890) を経て、Shackleton/Bailey (1968, 1987) に至るまでの刊本や、近代の研究文献については、Cicerone (Carlo di Spigno (ed.)), *Epistole ad Attico*, vol. I (Lib. I–VIII), Torino 2015 を見よ。

本稿では、Paolo Manuzio の註記については、Cicero, *Epistolae ad Atticum*, ad Brutum, ad Quintum fratrem, Venetiis 1540, Paulus Manutius, *Sholia in epistolas ad Atticum*, ad Brutum ad Quintum fratrem, 1540 のほか、より充実した Paulus Manutius, *Commentarius in Epistolas Ciceronis ad Atticum*, Venetiis 1568 を利用した。Louis C. Purser, *Ciceronis Epistulae*, vol. 2, pars prior (Lib. I–VIII), 1903 は、Paulus Manutius について 1563 年版を挙げている。Paolo Manuzio の註記はその後の刊本でも掲載されてゆくが、Ioannes Georgius Graevius, *Ciceronis Epistolarum libri XVI ad Atticum*, tom. I, Amstelaedami 1684 の本文脚註には様々な学者による註記が付されるほか、Paulus Manutius, *Commentarius* が別に収録されており便利である。

Aldo 及び Paolo Manuzio について、ごく簡潔には、John E. Sandys, *A History of Classical Scholarship*, vol. II, Cambridge 1908, p. 98–101, Graevius について *ibid.*, p. 327–328 を参照。

なお、この書簡を、友人ブルートゥスのためのアッティクスによる介入例として説明する比較的新しい研究として、Olaf Perlwitz, *Titus Pomponius Atticus. Untersuchungen zur Person eines einflußreichen Ritters in der ausgehenden römischen Republik*, Stuttgart, 1992, S. 81–84, キケロに見られる金銭取引に関する 20 世紀初頭の論文として Alois Früchtel, *Die Geldgeschäfte bei Cicero*, Diss., Erlangen 1912 (利息関連については S. 127–151) があり、キケロの書簡を社会構造を背景とした金銭取引の側面から分析した最近の un posthume ouvrage として、Maria Ioannatou, *Affaires d'argent dans la correspondance de Cicéron. L'aristocratie sénatoriale à ses dettes*, Paris 2006 があ。とりわけ p. 133–138, p. 326 を見よ。

- 27) Vgl. Glück, *Pandekten*, Bd. 21, supra not. 11, S. 116, Rein, *Das Privatrecht*, supra not. 6, S. 640–64. 教科書として、例えば、Henry J. Roby, *Roman Private Law*, vol. 2, Cambridge 1902, Aalen 1975, p. 74, n. 2. 同じく重利容認の証拠とする Paul Frédéric Girard, *Manuel élémentaire de droit romain*, 8. éd Paris 1929, 2003, p. 550, n. 2 は、キケロの告示を月毎の重利の禁止に、元老院議決を重利の一般的承認に、重利を禁止する学説彙纂の法文 D. 12.6.26.1, D. 42.1.27 を利息の上限を元本額とする制限に結びつけている。
- 28) Theodor Mommsen, *Der Zinswucher des M. Brutus*, in: *Hermes*, Bd. 34. H. 1 (1899), S. 145–150.

- 29) Carl Bardt, Der Zinswucher des M. Brutus, in: *Jahresbericht über das Königlichen Joachimsthal'sche Gymnasium für das Schuljahr 1897/1898*, Berlin 1898, S. 1–8. 彼は、ベルリン大学でモムゼンにも学び、ローマの喜劇翻訳や、後に見るように、Teubnerのキケロ書簡集の註解を担当するほか、*Zur Technik des Übersetzens lateinischer Prosa*, Leipzig 1904 を著し、翻訳の Kunst を音楽家や俳優の養成と比較するなど、古典語の教育者としても著名であった。
- 30) Wilhelm Sternkopf, Der Zinswucher des M. Brutus, *Gymnasium zu Dortmund. Jahresbericht über das Schuljahr 1899–1900*, Dortmund 1900, S. 9–23.
- 31) Ludwig Gurlitt, Bsp. C. Bardt, Th. Mommsen, Th. Schiche, Wilhelm Sternkopf, in: *Berliner Philologische Wochenschrift*, 20. Jahrgang, Leipzig 1900, sp. 1418–1423. Gurlitt についての邦語文献として、上山安敏『世紀末ドイツの若者』講談社 (1994) 64–65 頁、寺田栄太「ルードヴィッヒ・グルリットの教育思想の特質——ヴァンターフォーゲルの関与に注目して——」研究論叢 (神戸大学教育学会) 25 号 (2019) 25–35 頁を参照。
- 32) Perlwitz, *Titus Pomponius Atticus*, supra not. 26, S. 81–85, Fn. 291. さらに, Martin Schanz/Carl Hosius, *Die römische Literatur in der Zeit der Republik*, 4. Aufl., München 1927, 1979 には, Brutus を論じるにあたって, S. 396 に研究文献が掲載されている。
- 33) アッティクスによる介入の典型例 (Musterbeispiel) として書簡を検討する比較的新しいものとして, Perlwitz, *Titus Pomponius Atticus*, supra not. 26, S. 84–85 を見よ。
- 34) Adolf Stoll, *Friedrich Karl v. Savigny: ein Bild seines Lebens mit einer Sammlung seiner Briefe*, 3 Bde., Berlin 1927–1929 のほか, G. Kleinheyer/J. Schröder, *Deutsche und Europäische Juristen aus neun Jahrhunderten*, 6. Aufl., Tübingen 2017, s.v. Savigny を見よ。
- 35) 彼の判決起草は 138 にのぼるとされる。Erik Wolf, *Grosse Rechtsdenker der deutschen Geistesgeschichte*, 4. Aufl., Tübingen 1963, S. 520.
- 36) Vgl. z. B., Heinrich Barta, *Kausalität im Sozialrecht: Entstehung und Funktion der sogenannten Theorie der wesentlichen Bedingung*, Berlin 1983, S. 68, Anm. 93.
- 37) Stoll, Savigny, supra not. 34, S. 168, Gudrun Seynsche: *Der Rheinische Revisions- und Kassationshof in Berlin (1819–1852). Ein rheinisches Gericht auf fremdem Boden*, Berlin 2003.
- 38) Denneker, Savigny, supra not. 5, S. 94–95. «unglücklichen Mittelding zwischen einem Geschäftsmann und einem Professor ... seit 1822 quält ihn ein schmerzhaftes, migränerartiges Kopfleiden, das ihn in seiner Arbeit zeitweise gänzlich lähmt. Badekuren und Reisen, ... bringen nur vorübergehende Besserung. Die Reise nach Genua, Neapel und Rom dehnt sich bis zum Sommer 1827 aus. ... Allmählich läßt er

aber die Nachbereitung der Stunden mit den Studenten entfallen, auch aus der Akademie und aus dem Spruchkolleg zieht er sich zurück».

- 39) 初版の、1巻は15年、2巻は16年、3巻は22年、4巻は26年、5巻は29年、6巻は31年出版である。
- 40) Denneeler, *Savigny*, supra not. 5, S. 94.
- 41) なるほど、古代の利息表記は月利が原則であり、本稿で問題の重利も、後に見るようにこの事件でも Mommsen が不当にも想定する月毎に重利計算がなされる苛酷な場合もあったが、以下、原則として分かりやすい年利の表記で統一する。
- 42) ガビニウスによる rogatio 又は lex については、G. Rotondi, *Leges publicae populi romani*, Milano 1912, Hildeheim 1990, p. 371–374 を参照。もっとも法律の名称につき text latin があるわけではない。法律の詳細につき、M. Bonnefond, *La Lex Gabinia sur les ambassades*, in: C. Nicolet (dir.), *Des Ordres à Rome*, Paris 1984, p. 61–99 特に p. 87–94 を見よ。Cf. Jean Andreau, *Quelques remarques sur la uersura*, in: E. Chevreau et al. (éd.), *Carmina iuris. Mélanges en l'honneur de Michel Humbert*, Paris 2012, p. 17.
- 43) 文書の内容から他の訳語の工夫も考えられるが、本稿の内容に関わらないため、単純に債務証書とした。この sygraphae と chirographum について、我々のキケロの書簡のみならず、外人が当事者である例から、ローマ市民に用いられてきた多数の参照箇所が挙げられた教科書としては Rein, *Das Privatrecht*, supra not. 6, S. 694–696 があり、法的な議論や両者の違いについては Paul F. Girard, *Manuel élémentaire de droit romain*, 8^e éd., Paris 1929, 2003, p. 532–533, Volterra, *Istituzioni* supra not. 11, p. 47–480, 田中周友「ローマ法に於ける消費貸借契約証書の効力に就いて」『法学論叢』27巻4号(1937)1–12頁を参照。cf. Gai. 3.134, Pseudo-Asconius in Verr. 2.1.36.91, in Carolus G. Bruns (ed.), *Fontes iuris Romani*, II. Scriptores, Friburgi et Lipsiae 1993, S. 74. 91.
- 44) ちなみに、これにつき、Thür は、ローマも、紀元前1世紀の東地中海の法生活に組み込まれていたことを指摘している。Gerhard Thür, *Rez. Klaus Wille, Die Versur*, in: ZSS. Rom., Bd. 107 (1990), S. 629.
- 45) Rotondi, *Leges*, supra not. 42, p. 373, Theodor Mommsen, *Römisches Strafrecht*, 2. Aufl., Leipzig 1899, Aalen 1990, S. 886, Fn. 1 は、我々が検討するキケロの書簡の «ut neve Salaminis neve qui eis dedisset fraudi esset» から、厳格な意味での刑罰 (Straf) の制裁はなく、おそらく過料 Mult (multa, amande) であったとする。
- 46) Perlwitz, *Titus Pomponius Atticus*, supra not. 26, S. 81 特に Fn. 294 を見よ。さらに、Mommsen, *Staatsrecht*, 3. Bd. 2. Teil, supra not. 12, S. 1154 及びモムゼン (長谷川博隆訳)『ローマの歴史 IV』名古屋大学出版会 (2007) 137 頁を参照。
- 47) Z.B. Mommsen, *Der Zinswucher*, supra not. 28, S. 145. «unter Decknamen zweier

römischen Banquiers M. Scaptius und P. Matinius in der That von M. Brutus». Perlwitz, *Titus Pomponius Atticus*, supra not. 26, S. 81. «den Geschäftsträgern des Brutus auf Zypern». 実際、ブルタルコスの肯定的な評価に対して、キケロの書簡は、ブルートゥスの属州都市に対する年利 48% の貸付けと取立ての執拗な試みから、彼の別の側面を伝えるものとして、簡便な事典 (例えば、ダイアナ・パウダー[編], 長谷川岳男他訳『古代ローマ人名事典』原書房 (1994) 「ブルトウス」 291 頁) でも言及される。S. Hornblower/A. Spawforth (ed.), *The Oxford Classical Dictionary*, 3rd. Oxford 2003, p. 788, s.v. Iunius Brutus (2), Marcus は、冒頭でこの逸話に言及する。さらに後註 89 参照。その人間性につき、Giuseppina Allegri, *Bruto usuraio nell'epistolario ciceroniano*, Parma 1977 も参照。もっともキケロは彼らをブルートゥスにとって全くろくでなしの友人とも述べている。Cicero, *ad Atticum*, 6.2.4. «amicos habet meras nugas, Matinium, Scaptium.» 法律に対する元老院議決の介入については、Mommsen, *Staatsrechts*, 3. Bd. 2. Teil, supra not. 12, S. 1231, Fn. 2 を参照。

- 48) キケロは、前 63 年に執政官、前 58 年ギリシャ方面へ亡命し、前 57 年カエサルの手許でローマへ帰還している。この属州総督赴任については、キケロにとっては不本意で、更新されないように友人に頼んでいる。マティアス・ゲルツァー (長谷川博隆訳) 『キケロ』名古屋大学出版会 (2014) 183–186 頁, Matthias Gelzer, *Cicero. Ein biographischer Versuch*, Wiesbaden 1969, S. 226–228, アントニー・エヴァリット (高田康成訳) 『キケロ もう一つのローマ史』白水社 (2006) 281 頁以下, 我々の事件については、294–295 頁を参照。キケロ自身はこの段階でカエサルから 80 万セステルティウスを借り、利息付で 82 万セステルティウスの債務を負っていた。Cicero, *Atticum*, 5.2.1.

- 49) キケロがローマを離れたのは、前 51 年 5 月 1 日、エペソスには 7 月 22 日、属州の最初の都市ラオディケイアに入ったのは、7 月 31 日である。周知のように、属州総督による従属民に対する圧政は常態化していたが、キケロはそうではなかった。ゲルツァー『キケロ』(前註 48) 185 頁, Gelzer, *Cicero*, supra not. 48, S. 228 «Der Vorgänger Ap. Claudius hatte die Untertanen mit den üblichen Praktiken drangsaliert und bot so eine gute Folie zu Ciceros *iustitia, abstinencia, clementia*.»

- 50) サヴィニーは、Cicero, *Atticum*, 5.21.[10] 及び 6.1.[5] を援用する。ちなみに、キケロとブルートゥスの関係については伝統的なテーマであるが、比較的近年の研究として、Giulia Santamaria, *La fortuna letteraria di Bruto cesaricida fino all'età augustea*, <https://uniba-it.academia.edu/GiuliaSantamaria> があり、前 51 年 12 月 19 日の *Atticum*, 5.20.6. «Quem non minus amo quam tu, paene dixi quam te» と、前 50 年 2 月 13 日の *Atticum*, 5.21.10. «Familiaris habet Brutus tuus ...», 前 50 年 2 月 20 日の *Atticum*, 6.1.6. «accipiam equidem dolorem mihi illum irasci, sed multo maiorem non esse eum talem qualem putassem» など、本稿で扱う書簡や、さらに

は Atticum, 6.3.7. «huius nebulonis oratione si Brutus moveri potest, licebit eum solus ames, me aemulum non habebis. sed illum eum futurum esse puto qui esse debet. tibi tamen causam notam esse volui et ad ipsum haec perscripsi diligentissime. omnino (soli enim sumus) nullas umquam ad me litteras misit Brutus, ne proxime quidem de Appio, in quibus non inesset adrogans, ἀκονονόητον aliquid. tibi autem valde solet in ore esse Granius autem non contemnere se et reges odisse superbos. in quo tamen ille mihi risum magis quam stomachum movere solet. sed plane parum cogitat quid scribat aut ad quem.» とのニュアンスの差 (p.31-35) や プルートゥスからアッティクスへの書簡 (Cicero, *ad Brutum*, 1.17.1, 4) におけるキケロに対する評価 (p.269-272) など、時の経過を反映した指摘がある。

- 51) この部分については、裁判を思わせる用語で解説されることもあるが、正規の裁判ではなく、むしろ属州総督による和解勧告だと理解すべきであろう。Thür, *Rez. Wille, Die Versur*, supra not. 44, S. 628.
- 52) 正確に、年利 12% 重利で 6 年間と計算すると 1,973.822684 になり、年利 48% の重利で 6 年後は 10,509.21537 になる。
- 53) この間の計算の研究につき、後に見るように、後代に Bardt が元本額を精密に確定しようと試みたが、Sternkopf も論証するように、最終的にはサヴィニーの結論に落ち着くことになる。Vgl. Perlwitz, *Titus Pomponius Atticus*, supra not. 26, S. 81.
- 54) D. R. Shackleton Bailey, *Cicero's Letters to Atticus*, vol. III (51-50 B.C.) 94-132 (Books V-VII. 9), Cambridge 1968, p. 84-85.
- 55) ちなみに、この箇所の、「私の告示に基づいた」とは、直前に «tota provincia singulas observarem itaque edixissem» とあるように、年利 12% とするキケロ自身の告示である。
- 56) 例えば、Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 11-12, Fn. 2 を見よ。動詞 consistere について、本来は sto の強調で、「しっかりと立っている」(subsisto) から「滞在・逗留する」(commoror) の意味になり、そこから存在・生成と停止・中止の二つの方向の語義が生じる。後者の用例として、例えば、Caesar, B. C., 2.12. «administratio belli consistit» (戦闘の中止) Plautus, *Asin.* 3.1.17. «omnis familiae causa consistit tibi» (家業の麻痺) があり、原告の立場での争点決定を表現する特殊な用例としては、D. 5.3.49. «Si bonae fidei possessor hereditatis velit ... consistere» がある。Forcellini, *Totius latinitatis lexicon*, Prati 1861, s.v. consisto. さらに Jacobus Cuiacius, *Commentarius in lib. III. Quaestionum Aemilii Papiniani*, in: *Opera omnia*, Tom. IV, Neapoli 1758, col. 73-75 も見よ。興味深いことに、Barnaba Brissonius, *De verborum significatione*, Halae Magdeburgicae 1743, Iohannes Calvinus, *Magnum Lexicon iuridicum*, Coloniae Allobrogum 1734, Henricus Eduardus Dirksen, *Manuale latinitatis fontium iuris civilis Romanorum*, Berolini 1837 といったローマ法源

の代表的なラテン語辞典には停止の用例は挙げられていない。

- 57) Pap. resp. 2 D. 22.1.7. «Debitor usurarius creditori pecuniam optulit et eam, cum accipere noluisse, obsignavit ac deposuit: ex eo die ratio non habebitur usurarum».
- 58) Robert Yelverton Tyrrell/Lous Claude Purser (ed.), *The Correspondence of M. Tullius Cicero*, vol. III, Dublin/London 1890, p. 173–174. Tyrrell については例えば W. B. Stanford/Robert Yelverton Tyrrell, in: *Hermathena*, No. 125 (1978), p. 7–21 を参照。
- 59) もっとも «the interest should have been simple according to my edict» とするが、その必然性はないと思われる。
- 60) Cicéron (L.-A. Constans/Jean Bayet (tr.), *Correspondance*, Tom. IV (Lettres CCV–CCLXXVIII (51–50 avant J.-C.)), Paris 1951, p. 143.
- 61) この点, Carlo di Spigno (ed.), *Epistole*, suora not. 26, p. 514 や Cicero (Helmut Kasten (Hrsg. und Übers.), *Atticus Briefe*, 5. Aufl., Düsseldorf/Zürich 1998, S. 334 などと同じである。
- 62) 7, 4 quae erat, Bailey, *Cicero's Letters*, supra not. 54, p. 242.
- 63) Simeon Bosius, *Animadversiones in Epistolas M.T. Ciceronis ad T. Pomponium Atticum*, Antwerpiae 1585, p. 73. «Consistere usura debuit] ... cessare debebant usurae, non modo illae graves, quas Scaptius petabat, sed etiam eae quae erant in meo edicto, hoc est, singulae centesimae non quaternae».
- 64) それぞれ «L'intérêt aurait dû cesser de courir» (L.-A. Constans/Jean Bayet, supra not. 60, p. 143), «L'interesse, commisurato secondo la normativa del mio editto, avrebbe dovuto essere sospeso» (Carlo di Spigno, supra not. 26, p. 515), «der Zinsendienst, wie er in meinem Edikt festgesetzt ist, hätte aufhören müssen.» (Helmut Kasten, supra not. 61, S. 335).
- 65) W. Kunkel/H. Honsell, *Römisches Recht*, 4. Aufl., Berlin 1987, S. 248 や M. Kaser/R. Knütel/S. Lohsse, *Römisches Privatrecht*, 21. Aufl., S. 323–324 は、神殿への寄託と利息進行停止を述べるが、ともに古典期法学やディオクレティアヌス帝勅法を援用しており、キケロ段階の Hinterlegung については触れられていない。
- 66) Savigny が挙げるテキストには non はなく、〈non〉と加えたりイタリックで non とするものや、脚註で «non is added by Ernesti» と指摘する版はある。
- 67) Manutius, *Commentarius*, supra not. 26, p. 275–276 では、bono nomine につき、«honesto: quia centesimas cum anatocismo concedebat edictum» とし、non bono につき、«turpi: quia quaternae contra edictum» として、人格の高潔と、不名誉の対比とした上で、«impetrabo [Scaptius] fortasse ab alio proconsule, Bruti gratia, cuius commendatio apud hunc minus valet, quam speravi» とする。
- 68) Lucius Iunius Moderatus Columella (Will Richter (Hrsg.), *De re rustica*, Bd. I,

München 1981, lib. 1. cap. 7, S. 76–77. «Nec rursus in totum remittendum, quoniam vel optima nomina non appellando fieri mala fenerator Alphius dixisse verissime fertur».

- 69) Bosius, *Animadversiones*, supra not. 63, p. 72. «24. Bono nomine] Hoc dilemmate summam arguit impudentiam Scaptii, qui bono nomine quaternas centesimas sperabat. nam pudens fuisset, si, bono nomine, contentus fuisset centesimis cum earum renovatione: aut ideo quaternas centesimas duceret, quod malum nomen foret. nam sortis amissae damnum multiplicatae usurae resarsissent, verum bono nomine quaternas petere impudentiae erat non ferendae. Bonum nomen vocat locupletes debitores, a quibus periculum non sit sortis amittendae, quantascunque usuras debeantnde Alphius foenerator, ut refert Columella, dicere solebat, optima nomina non appellando fieri mala». (下線は筆者による)
- 70) 例えば、フリースラントのアウソニウス・ポプマ (Ausonius van Popma, 1563–1613) も、「図々しいスカプティウスは、資力が十分で容易に弁済できる債務者に対しては、年利 12% しか請求せず、貧しく負債をかかえている者には年利 48% を強要したのである。優良債権と不良債権は、高利貸しのアルフィウスの表現にあるように、対立している。優良債権も請求しなければ不良債権になる」«Nam aut bono nomine] Impudens Scaptius, qui a debitoribus locupletibus, et facile solvendo non plus centesimis exigebat: a tenuioribus et obaeratis exprimebat quaternas centesimas. Bona et mala nomina sunt contraria, ut in dicto Alphii foeneratoris, Bona nomina non appellando fieri mala.» としている。ドイツの Iohannes Georgius Graevius (Johann Georg Graffé, 1632–1703), *Ciceronis Epistolarum libri XVI ad Atticum*, Tom. I, Amstelaedami 1684, p. 560 における転載による。cf. M. Tullii Ciceronis *Epistolarum ad Atticum libr. XVI, ex recognitione Ausonii Popmae Frisii. Ejusdem Popmae in eos commentarius et castigaciones*, Franekerae 1618.
- 71) John Edwin Sandys: *History of Classical Scholarship. Band 2: From the Revival of Learning to the End of the Eighteenth Century (in Italy, France, England, and the Netherlands)*, Cambridge 1908, Memphis TE, 2012.
- 72) Gronovius, *De centesimis usuris et foenore unciario adversus Theologistorico philosophologum*, Lugduni Batavorum 1661 及び *De centesimis usuris et foenore unciario ANTEΞΗΓΗΣΙΣ II*, Lugduni Batavorum 1664 である。
- 73) Gronovius, *De centesimis usuris*, supra not. 72, p. 72. «cum scribit Brissonis ... errat: nam in lege Gabinia nullus constitutus foenoris modus: sed poena et in dantes Romae foenori provincialibus et in provinciales accipientes. ... Hoc igitur Senatusconsultum fuit initium pro legitimis habendi centesimas», idem, p. 163–166. «AD-DENDUM mutatis exinde numeris. 41. ... Versura igitur fraus est huius iuris, quae

ne fiat, ac proinde, ne creditor ius crediti amittat in mutuando, diligentior esse debet. ... *Versura* non est, quod ille opinatus est, sed nihil aliud quam mutuum foenebre: somnium est legem Gabiniam vetuisse ius dici de pecunia sumpta sub usuris, ut alii creditori usuras debitas illa sorte solvas: nusquam legimus hoc unquam Romae legibus obnoxium fuisse. ... 42. ... Gabinia lex, ait, vetuit *ius dici de pecunia sub usuris sumpta per versuram*: ... Ita Cuiacius ad Africanum tract. IV. An tu *versuram* in illa lege putas esse simpliciter mutuum vel foenus? ... quod Cuiacius absque ulla veterum auctoritate tradidit, et hic sola Cuiacii fide repetivit. Utrum in lege Gabinia vox *versurae* posita fuerit, nec ne, ignoramus: si vero posita fuit, haud dubie significavit simpliciter mutuum vel foenus. Pergit: Deinde Gabinia lex non prohibebat usuram, multo minus mutuum, sed eas usuras, quibus ad alias solvendas sese debitores obstringebant. Immo lex Gabinia prohibebat Romae foenori provincialibus dari, provinciales accipere. Tum, Ea lex centesimas permittebat. Immo ne mentionem quidem habebat centesimarum, quantum de illa scimus: centesimas autem perpetuo foenore legitimas inter cives Romanos constituit illud Senatusconsultum *Sulpicianum* vel *Claudianum*, sive utroque nomine appellandum est *Suplicianum Claudianum*, ut dicitur *Lex Licinia Sextia*, *Lex Papia Poppaea*, *Lex Villia Titia*. ... Hinc collegimus sententiam et vim legis Gabiniae fuisse, ne provincialibus Romae *versuram* facere, id est, mutuum sub usuris sumere, liceret; si facissent, ne ex tali syngrapha ius redderetur: formula vero eadem verborum fuisse illam legem, quis pro certo audeat adseverare?». (下線は筆者による)

Barnaba Brissonius, *Antiquitates ex iure civili selectae*, in: *Opera minora*, Lugd. Batavorum 1747, p. 65b–p. 66a. «senatusque consultis effectum: quibus hoc comprehensum fuisse CICERO *lib. V. Epist. ult. ad Attic.* indicat, uti in creditorum causa centesimae perpetuo foenore ducerentur, vetitumque ex ea syngrapha ius dici, ex qua maius usura centesima foenus promissum esset: nec tantum foeneratoribus, et supra modum lege constitutum accipientibus, sed et *versuram* facientibus poenam constitutum».

- 74) 前註 70 で挙げた Ausonius van Pompea もすでにこの法律について、二つの条文があり、一つは、属州民との金銭消費貸借を禁じ、今一つは、年利 12% の制限利息を規定していたと解説していた。Graevius, *Ciceronis Epistolarum*, tom. I, supra not. 26, p. 557. «Lex Gabinia vetabat] Lex Gabinia habebant duo capita; Unum necuiquam in provinciis dare accipere pecunias in *versuram* liceret, alterum Ne gravior usura quam Centesima esset. Cum ego Bruti familiares Salminiis pecunias dedissent *versura*, et centesimas quaternas in syngrapha perscripsissent, ne ipsi lex Gabina fraudi esset, confugerunt ad duo Senatuscons. de illa syngrapha facta: quorum tamen neu-

trum centesimas quaternas nominatim permittebat; quas illi exigebant. *Pompa*». (下線は筆者による)

- 75) Graevius, *Ciceronis Epistolarum*, tom. I, supra not. 26, p. 557–558. «*Quod ex syngrapha ius dici lex Gabiniae vetaret*】… Hic rursus accipere pecuniam sub usuris in versuram, et pecunias dare in versuram, pecunias dare versura. Latinis ignota loquendi genera sunt. Lex Gabinia caverat ne ulli provinciali legato Romae pecunia sub usuris mutua daretur; et ne magistratus provinciales ex tali syngrapha ius dicerent, si qui Romani apud eos quererentur de provincialium debitis non solutis. Senatusconsulto autem illo cavebatur tantum ne multam legis Gabiniae subirent, qui Salaminiiis pecuniam dedissent, sub usuris mutuam; sed ut ius dicerent ex tali syngrapha Proconsules contra legem Gabiniam non cautum erat SC. *Gron.*».
- 76) Johannes Augustus Ernesti, *Ciceronis Opera omnia*, vol. 3. pars secunda. Epistolae, Oxonii 1810, p. 578–579. «… Sed lex ea voluit coercere foeneratorum avaritiam in usuris, quarum modum nulla lex statuerat. unde crudelitas eorum in usuris supra modum creverat. Sanxit igitur, ne magistratus ex syngraphis ius dicerent, sed ex edicto, in quo modus usurarum statueretur». ハレ大学そしてイエーナ大学の教授 Christian Gottfried Schütz (1747–1832) は, «quod e syngrapha ius dici lex Gabinia vetabat» に対する脚註で, «Vulgo legitur simpliciter quod lex Gabinia vetabat» とすでに Ernesti の読み方が一般的であることから始め, 彼の脚註をそのまま掲載した後, «Malui autem verba eodem ordine, quo paulo post recurrunt ponere: quod e syngrapha ius dici lex Gabinia cr [sic: v] etabat» としている。Christian Gottfried Schütz, *Ciceronis Epistolae ad Atticum, ad Quintum Fratrem et ad Familiares*, Tom. III, Halae 1810, p. 202–203.
- 77) まずは, Sextus Pompeius Festus (W. M. Lindsay (ed.)), *De verborum significatu*, Lipsiae 1913, p. 520, idem (M. A. Savagner (tr.)), *De la signification des mots*, Paris 1846, p. 684–685. «mutuam pecuniam sumere ex eo dictum est, quod initio qui mutuabantur ab aliis, non ut domum ferrent, sed ut aliis solverent, velut verterent creditorem» から, initium の意味が想定された。近年の研究として, とりわけ, Klaus Wille, *Die Versur. Eine rechtshistorische Abhandlungen über die Zinskapitalisierung im alten Rom*, Berlin 1984 を見よ。我々の事件については S. 13–56 で詳細に検討されている。そして, この研究をきっかけに, Hans-Peter Benöhr, *Versura*, in ZSS. Rom., Bd. 107 (1990), S. 217–248 が公にされた。さらに, 前者についての Thür, *Bespr.*, supra not. 44, S. 624–629, 後者についての Andreau, *Quelques remarques*, supra not. 42, p. 11–21 はともに教えられるところが多い。もちろん, いずれの研究もキケロの書簡を紹介する。さらに Kunkel/Honsell, *Römisches Recht*, supra not. 65, S. 243 を参照。史料に頻繁に確認できるものであり, その意味につき Benöhr に基づき, Andreau は

仮に七つの可能性を挙げ、とりわけ消費貸借債務の更改と、そうした限定のない借主側からの消費貸借に絞っている。ちなみに前註 56 に挙げたローマ法源の三つのラテン語辞典のうち Calvinus, *Lexicon*, supra not. 56 だけは, *creditoris conversio* と単なる *aes alienum* の二つの意味を挙げている。

- 78) Jacobus Cuiacius, *Commentarius in Quaestionum Aemilii Papiniani*. in: *Opera*, Tomus IV, Neapoli 1758, col. 46.
- 79) Cuiacius, *Commentarius ad tit. Dig. de usuris et fructu. et c.* in: *Opera*, Tomus X, Neapoli 1758, col. 1266.
- 80) Manutius, *Commentarius*, supra not. 26, p. 273 及び Graevius, *Ciceronis Epistolarum*, Tom. I, supra not. 26, p. 162 は、キケロ『アッティクス宛書簡集』5 巻書簡 21 に対する註解では簡潔に「*iuris dicendi. ep. 1. lib. 6*」と述べるのみであるが、キケロから前 50 年 7 月に補充財務官に宛てられたキケロ『縁者・友人宛書簡』2 巻書簡 17 の、「戦利品は隊長たち (*praefecti*) によって、私に割り当てられたものは、財務官によって管理されるという具合に、すべての金銭が取り扱われているのだから」(*Omnis enim pecunia ita curatur [tractatur] ut praeda a praefectis; quae autem mihi attributa, est a quaestore curetur.*) に対する註解で、四種類を詳細に説明し、キケロが我々の書簡の箇所では報告しているのは、裁判権を有する隊長職が拒絶されたことであるとしている。

«Genera igitur fuere quattuor, unum eorum, qui equestoribus turnis praerant: alterum, qui evocatis: tertium, quibus in civitatibus proconsul assidue commorari non posset, in iis ipsi ius dicerent, et in extremo anno ad generales conventus, a proconsule indictos, profiscerentur, ut, si quid in civitatibus perperam iudicassent, querellas omnium proconsul audire, et nescindere praefectorum sententias posset. Quartum genus fuit praefecti fabrum, vel praefectus potius; nam unum dumtaxat habuisse Cicero videtur. ... De iis, qui ius dicerent, ad Att. epist. 4.7.11.21. lib. 5 et ad eundem epist. 1.2.3. lib. 6 quibus Cicero amicorum rogatu, aut iudicio suo praefecturas detulit iuris dicendi in civitatibus iis reiectis, qui negotiarentur, ne iustitiam lucri cupiditas perturbaret».

cf. Graevius, *Ciceronis Epistolarum libri XVI ad familiares*, Tom. I, Amstelaedami 1684, fol. 144b–145b.

- 81) Savigny, *Geschichte des römischen Rechts im Mittelalter*, Bd. I, 2. Aufl., Heidelberg 1834, Darmstadt 1956, S. 62–64.
- 82) Ernesti, *Ciceronis Opera*, supra not. 76, vol. 2, Oxonii 1810, p. 578, n. 64. «Quia *anniversarium* substantive nusquam dicitur apud bonae latinitatis auctore, *anatocismi anniversario* verum esse non potest ... mihi totum verbum *anniversario* suspectum est, quod alias simpliciter dicuntur *centesimae cum anatocismo*, etiam in hac epistola:

intestque tò *anniversarium* in ipso anatocismo, ut patet e VI, 3. ubi est: *centesimis, revocato in singulas annos foenore*, item ep. 1. *centesimas sexenii cum renovacione annorum singularum.*» もっとも Ernesti 自身が末尾に挙げている二つの表現も年毎の説明をしており、簡潔な形容詞で表現していると理解すればよいと思われる。Schütz, *Ciceronis Epistolae*, Tom. III, supra not. 76, p. 201–202. «Hactenus Ernesti; cuius rationibus certissimis adductus anniversario ex glossa natum delevi. Recte autem iam Manutius anatocimum interpretatus est usurarum in singulos annos quasi regenerationem». このように Schütz は重利が年毎であることは Manutius の解釈以来であるとするが、*anniversarius* を後代の註記であるとする必要はないと思われる。

- 83) Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 11, Fn. 1.
- 84) サヴィニーが引用するのは、Ernesti, *Clavis Ciceronis sive Indices Latinitatis*, Halae 1769 の s.v. Anatocismus である。この作品は、キケロの著作について、*index legum*, *index geographicus*, *index historicus*, *index artificum*, *grammaticorum* etc. に続いて、*index Latinitatis*, *index Graeco Latinus* が掲載されており、*index* とはいえ、この anatocismus のように、編者 Ernesti の解説が付され、単なるリストである W. A. Oldfather et al., *Index verborum Ciceronis epistularum*, Urbana IL. 1938 や簡単に意味だけが挙げられる H. Merguet, *Handlexikon zu Cicero*, Leipzig 1905, Hildesheim 1962 とは異なり、今日でもなお役に立つ。
- 85) Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 16.
- 86) Cicero (L. C. Purser (ed.)), *Epistolae*, vol. II, pars. I, Oxonii 1903 や Budé 叢書 Constans/Bayet, *Cicéron. Correspondance*, Tom. IV, supra not. 60, p. 142 は、*bienni* を採用する。前者の脚註 28 には、「*bienni*: Sternkopf (ex *vienni* pro *sexenni*): *sexenni codd.*», 後者の脚註 5.9 には、「*bienni* Sternkopf: *sex(s)en(n)ii* (ex *viennii*, ut *vid.*) Ω, vett. Winstedt, Holmes, Springer」とある。しかし Carlo di Spigno は、Sternkopf の異読を不適切であるとして採用しない。2 年では債務の更改は一度のみとなり、*cum renovatioe signlorum annorum* や *renovatis quotannis* といった複数形の表現に合致しないというのである。もっともこの批判は、キケロがあくまで最後の更改からの期間を述べていたとするなら、複数形の表現と矛盾するわけではないと思われる。
- 87) Manutius, *Commentarius in Epistolas Ciceronis ad Atticum*, Venetiis 1547, p. 183v., Manutius, *Commentarius*, supra not. 26, p. 295. «quid, si, A prima quidem syngrapha? ut *centesimae ducerentur et a prima syngrapha, et cum anatocismo*».
- 88) 前註 28–32 参照。この二つの作品を即座に紹介しているのが、Theodor Schiche, 9. Ciceros Briefe 1897. 1898, C. Erklärung und Textkritik. 12) C. Bardt, 13) Th. Mommsen, in: *Zeitschrift für das Gymnasialwesen*, 53. Jahrgang, Berlin 1899, S. 325–329 である。Sternkopf は、論稿完成の段階で、友人の Wilhelm Heraeus (1862–1938)

とこの報告から Mommsen の論稿を知ったと述べる。Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 19.

- 89) Bardt, *Der Zinswucher*, supra not. 29, S. 1. «Von dem Handel zwischen der Stadt Salamis auf Cypren und hinter den römischen Wucherer Scapius und Matinius stehenden Brutus», S. 5. «... und sein [Ciceros] Befremden wurde zur Entrüstung, als ihm Brutus gleich darauf in dünnen Worten mitteilte, – dass der Wucherer er selber sei, Scaptius nur ein vorgeschobener Strohhalm.», Mommsen, *Der Zinswucher*, supra not. 28, S. 149. «die Agenten des Brutus», Sternkopf, supra not. 30, S. 9. «nur vorgeschobene Stromänner». cf. Allan Ch. Jonson et al, *Ancient Roman Statutes*, Austin TX, 1961, p. 82. 近年の経済史の研究も同様である。Philip Key, *Rome's Economic Revolution*, Oxford 2014, p. 195, p. 242 n. 56. «the elite probably used intermediaries or brokers ... to disguise their involment in loans» 及び p. 238, さらに前註 47 参照。
- 90) Bardt, *Der Zinswucher*, supra not. 29, S. 1–2.
- 91) Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 10. «Die Bedingung lautete demnach einfach auf quaterne Anatocismus war nicht vorgesehen, und höchstens auf versteckte Weise konnten von nicht gezahlten Zinsen wieder Zinsen genommen werden, ... Man denkt doch, die Salamier würden wenigstens anfangs ihren Verpflichtungen nachgekommen sein und monatlich ihre 4 vom Hundert erlegt haben, wie dies ausgemacht war, wenn sie auch vielleicht nicht jedes Mal und nicht dauernd im strande waren, die Zinsen voll oder auch nur teilweise aufzutreiben».
- 92) Bardt, *Der Zinswucher*, supra not. 29, S. 2, Fn. 2. 重利を想定せず, 一度も弁済がなされていないとすれば, 数式は, $C = \left(1 + \frac{48^n}{100}\right) = 200$ となる。
- 93) Mommsen, *Der Zinswucher*, supra not. 28, S. 148. «Ein Capital von 12 Talenten wächst bei einem Zinsfuss von 48% bei monatlichem Zuschlag der Zinsen zum Capital in 4 Jahren auf 85 Talente (genau in 4 Jahren 2.03 Monat auf 85, 4 Talente) dieses Capital bei einem Zinsfuss von 12% mit gleichartigem Zuschlag der Zinsen zum Capital weiter nach 1 Jahr 9 Monaten (genau 1 Jahr 9.7 Monat) auf 106 Talente. Dasselbe Capital wächst bei einem Zinsfuss von 48% mit gleichartiger Berechnung der Zinseszinsen in fast 6 Jahren (genau 5 Jahren 11.73 Monat) auf 200 Talente». ともに Gurlitt, Bsp., supra not. 31, Sp. 1419 において簡単にまとめられている。
- 94) Thür, Rez. Wille, *Die Versur*, supra not. 44, S. 627 の Überbrückungsdarlegen や Umschuldung の指摘による。
- 95) 類似の誤りの例として彼は, Liv. 45.15.9. «anni et sex mensum tempus prorogaretur» 「〔戸口調査官の〕1年半の任期が延長されるよう」(前 168 年)について, Cod. Vind. が bimensus と読んでいること, また Liv. 28.28.4 (前 206 年)において

固有名詞デキムス・ウィベッリウス (D[ecimum] Vibellium) が sex bellium と誤読されたことなどを挙げている (cf. Liv. 26.15.11)。しかし 2 年と読むことは、すでに述べたように、彼以前のサヴィニーのみならず、後の Gurlitt (Gurlitt, Bsp., supra not. 31, Sp. 1420, Fn. 2) などからも賛同を得ていない。もっとも近代刊本の立場につき、前註 86 を見よ。

- 96) Sternkopf, Der Zinswucher, supra not. 30, S. 18.
- 97) Sternkopf, Der Zinswucher, supra not. 30, S. 10. なお, Cicerone (Carlo di Spigno (ed.)), *Epistole*, supra not. 26, p. 476, n. 10 は, このことを指摘している。
- 98) Rein, *Das Privatrecht*, supra not. 6, S. 627, Fn. 1 は cum anatocismo anniversario と perpetuo fenore との (6.2), 又は «nec perpetuis, sed renovatis quotannis» との対比 (6.1) と捉えていた。
- 99) Sternkopf, Der Zinswucher, supra not. 30, S. 10.
- 100) Sternkopf, Der Zinswucher, supra not. 30, S. 11. «Sie [die Salminier] waren gern bereit zu zahlen; eigentlich, so meinten sie verbindlich, geschehe es aus Ciceros Beutel, denn die Abgabe, die sie früher immer dem Statthalter entrichtet hätten und die ihnen Cicero erlassen habe, sei zur Begleichung ihrer Schuld mehr als ausreichend». Cicero, *Atticum*, 5.21.11. «Quod enim praetori dare consuessent, quoniam ego non acceperam, se a me quodam modo dare, atque etiam minus esse aliquanto in Scapti nomine quam in vectigali praetorio. conlaudavi homines», 「つまり, 総督に与える慣わしであったものを私自身は受け取っていなかったから, 彼らはいわば私の金で払うというわけである。実際, 彼らが言うには, スカプティウスへの謝金の額の方が退任する総督に納める納付金よりもいくらか少なかったのである。私は彼らを賞賛した」。Cf. Ioannatou, *Affaires*, supra not. 26, p. 128.
- 101) Cicero, *Atticum*, 5.21.12. «ait se nihil contra dicere».
- 102) Cicero, *Atticum*, 5.21.12. «Adsidunt, subducunt ad nummum convenit».
- 103) Cicero, *Atticum*, 5.21.12. «Dedi autem [veniam] homini impudenter petenti. Graecis querentibus, ut in fano deponerentulantibus non concessi».
- 104) Sternkopf, Der Zinswucher, supra not. 30, S. 13.
- 105) Cicero, *Atticum*, 5.6.2, «ego autem meis rebus gestis hoc sum assecutus, ut bonum nomen existimer».
- 106) むしろ, サヴィニーの解釈に沿った Boot による脚註の以下の説明は分かりやすい。Cicero (Iohannes C. G. Boot (rec.)), *Epistolarum ad T. Pomponius Atticum libri XVI*, Amstelodami 1865, p. 251. «Nam – sperabat. Scaptius ita ratiocinabatur: Aut Salmini bonum nomen sunt, ut de sorte securus esse possim, et tunc centosimis contentus ero; aut si solvendo non erunt, minando me sortem exacturum, quaternas centesimas exprimam. ... Hac ratione si verba cum Savignio l. 1. p. 182 expri-

cantur, neque Orellio, qui *non impudens magis quam stultus*, neque Ernesto *non ante contentus* inserenti obtemperandum esse patet. Sed pro contentus erat necessario *contentus erit* scribendum». もっとも、全体の説明に不信感を持つには説明されたことで十分だとし、テキストを変更して、bonus を低利の真摯な請求を行う債務者の人格に関係させようとする、キケロの書簡に対する註解書における Bardt の説明も、トートロジーであると非難する。Vgl. C. Bardt (Hrsg.), *Ausgewählte Briefe aus Ciceronischer Zeit. Kommentar*, I. Brief 1–61, Leipzig, 1898, S. 127. «Dabei schrie ein Teil, Scaptius sei unverschämt, ein anderer, er sei nicht recht gescheit (*nihil stultius*); nicht recht gescheit, meint Cicero, war er wohl nicht, aber unverschämt; denn entweder musste er sich auf Grund eines ehrlichen Anspruchs (*bono nomine*: eigentlich der solide begründete Posten im Conto buche) mit 12% begnügen, und dann war er ein rechtschaffener Man, oder er verlangte auf Grund eines wucherischen Anspruchs (*non bono nomine*) 48%, und dann war er eben ein unverschämter Wucherer». Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 10.

- 107) Tyrrell/Purser (ed.), *The Correspondence*, vol. III, supra not. 58, p. 166–167. 彼はサヴィニーに見られるような通説に加え、bono nomine を適法利息の請求、non bono を超過利息の請求と解する Watson の説を紹介した後に、Sternkopf が紹介する説を述べ、「満足」の部分で、「満足しえた」(contentus esse poterat) として posse の未完で過去で理解する。
- 108) おそらくタルソスでの審理の 2 年前、つまり前 51 年の新年で、なおアッピウスが属州総督であり債権者は高圧的であった。その後、キケロ到着まで新たな債務証書の交付は行われず、キケロの統治下で、サラムス市民は最後の債務証書に従い、重利での年利 12% を支払う用意があった。Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 18.
- 109) Mommsen, *Der Zinswucher*, supra not. 28, S. 145–150.
- 110) Schiche, *Ciceros Briefe*, supra not. 88, S. 327.
- 111) Mommsen, *Der Zinswucher*, supra not. 28, S. 148. «Hinsichtlich der Zinsenberechnung werden zwei Formen unterschieden: die dem Gläubiger vorteilhaftere ist das *fenus perpetuum* (5,21,12) oder *usurae perpetuae* (6,2,7), die den Schuldner minder drückende der *anatocismus anniversarius* (5,21,11), *usurae renovatae quotannis* (6,2,7), *renovatum in singulos annos fenus* (6,3,5)».
- 112) Mommsen, *Staatsrecht*, 3. Bd. 2. Teil, supra not. 12, S. 1237, Fn. 2.
- 113) Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 20. «Meditare adversus Brutum causam meam, si haec causa est contra quam nihil honeste dici potest, praesertim cum integram rem et causam reliquerim». Bardt は、この meditare を弁論の準備という専門的な意味であったとする。C. Bardt (Hrsg.), *Ausgewählte Briefe aus Ciceronischer Zeit: Kommentar; verkürzte Ausgabe*, Leipzig 1905, S. 78.

- 114) Mommsen, *Der Zinswucher*, supra not. 28, S. 147. «Man könnte auf die Vermutung kommen, dass die Ueberlieferung schadhaf ist ...».
- 115) Vgl. Mommsen, *Der Zinswucher*, supra not. 28, S. 147. «Cicero gehört zu den Halbnaturen, die nicht vor dem Unrecht, aber zu dessen Nacktheit zurückschrecken und denen nicht die Rechtschaffenheit, aber die Reputation der Rechtschaffenheit am Herzen liegt. In der ganzen Darstellung ist er der gerechte Beschützer der wirtschaftlich Schwachen, auch, wie das bei solchen Naturen der Fall zu sein pflegt, denen gegenüber, die ihn bis auf die letzte Faser seines Herzens kennen und von denen er sich gekannt weiss ...».
- 116) Gaston Boissier, *Cicéron et ses amis: Étude sur la société romaine du temps de César*, 8éd., Paris 1888, p. 93. «mais au moment de porter sur lui un jugement sévère, rappelons-nous en quel temps il vivait, et songeons à ses contemporains. Je ne veux pas le comparer aux plus méchants, son triomphe serait trop facile; mais entre ceux qu'on regarde comme les plus honnêtes il tient encore une des meilleures places».
- Sternkopf と同様の非難は, Bardt (Hrsg.), *Ausgewählte Briefe*, supra not. 113, Einleitung, p. XX にも見られる。«Gewiß wird hohe Aufrichtigkeit bemüht sein, solchen Widerspruch zu meiden oder doch zu mildern, und wäre die Gesellschaft, wie sie sein sollte, so könnten solche Fälle gar nicht vorkommen; aber wer, anstatt zu erwägen, daß sie sehr menschlich sind, darauf schwere sittliche Vorwürfe gründet, verfährt unbillig und unwissenschaftlich. In dieser Beziehung seine sämtlichen Äußerungen völlig überein stimmend zu gestalten, ist in Zeiten einer sehr vertieften Bildung des Herzens ungemein schwer und erfordert außerordentlich feinen Takt; wie darf man sich wundern, daß in Rom, wo die glatte konventionelle Höflichkeit wie ein dünner Firnis vielfach über harter Selbstsucht, ja plumper Roheit liegt, die feine Linie, die die Verbindlichkeit von der Unwahrhaftigkeit scheidet, nicht immer ein gehalten wird?»
- 117) Cicero, *Atticum*, 5.1.7. «sed quid eis fiet, si huc Paullus venerit». Sternkopf, *Der Zinswucher*, supra not. 30, S. 18.
- 118) Bardt, *Der Zinswucher*, supra not. 29, S. 5. «Was aus den armen Salaminern wurde, ist nicht überliefert, aber Brutus ging, sobald Cicero seinen Posten verlassen hatte, nach Asien und verweilte dort während des ersten Jahres des Bürgerkrieges, wo die allgemeine Verwirrung ein Fischen im Trüben nur zu sehr erleichterte; das lässt nichts Gutes vermuten».

(付 記) 本稿は, 2020 年度 南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2 の研究成果である。